高岡市埋蔵文化財調査概報第６冊

石塚遺跡調査概報Ⅱ

―都市計画道路-下伏間江・福田線築造に伴う昭和62年度の調査―

1988年３月

高岡市教育委員会

序

石塚遺跡は，弥生時代中期の集落跡として著名な遺跡です。規模や存続期間等より，周囲の小集落に対する母村としての機能を果していたものと推定されています。出土土器は畿内を中心に発達した櫛描文土器であり，畿内的弥生文化が展開した様相が窺われます。一方出土土器における，弥生時代前期の西日本系遠賀川式土器の確認，付近に縄文時代晩期の遺跡が存在する環境と言った点より，稲作文化伝播期の様相を探る意味においても，十分に期待を抱かせる遺跡でもあります。

さて，此度の調査は，都市計画道路－下伏間江・福田線築造に伴うものであり，昨年度の調査に続くものです。その結果，弥生時代は素より，古墳時代前期・平安時代・中世と各時代に亘り，遺構・遺物が発見され，当遺跡が弥生時代以降も利用され続けた地区であることが判明いたしました。近辺に存在する数々の遺跡と共に，高岡市街地の南西郊である当地域は，当市の歴史を知る上で，貴重な資料を包蔵している，重要な遺跡地帯と言えます。

今回の調査におきましても，多くの方々より御指導・御援助を賜わりました。また，御協力いただきました地元の皆様，関係各位に厚くお礼申し上げます。

本書が，高岡市域の歴史の解明に少しでも寄与することができ，文化財保護の一助になれば幸甚です。

昭和63年３月31日

高岡市教育委員会
教育長　竹　下　外　男

例　　言

1．本書は，高岡市建設部道路課による都市計画道路－下伏間江・福田線築造に伴う，石塚遺跡の調査の概要報告書である。

2．当調査は，高岡市建設部道路課の委託を受けて，高岡市教育委員会が実施した。

3．当調査は，本調査地区と試掘調査地区から成る。

4．本調査地区は，富山県高岡市和田1,205に所在する。調査期間は，昭和62年６月８日から８月28日までである。

5．試掘調査地区は，富山県高岡市上北島248他に所在する。調査期間は，昭和62年11月９日から12月１日までである。

6．当調査は，高岡市教育委員会社会教育課文化係文化財保護主事山口辰一が担当した。

7．調査事務は，高岡市教育委員会社会教育課文化係長河合甚郎・同主任片折正明が担当し，教育委員会参事・社会教育課長熊木史郎が総括をした。

8．図面の方位は真北（座標北）である。

9．遺構は下記の記号を使って表わした。

　　ＳＤ―溝，ＳＫ―土坑，ＳＸ―その他

10．本書の記述においては，特に断わらない限り，本調査地区の調査成果を示すものとする。

11．報告書作成に当たって，富山考古学会西井龍儀氏，富山大学人文学部宇野隆夫氏，福島県文化センター芳賀英一氏から，指導・助言をいただいた。

12．本書の執筆は，山口が担当した。

調査参加者名簿

発掘

青木真佐子，上田順子，越砺為子，岡島敏雄，笠島庄蔵，後藤誠二，島田英子，島田文子，津田安次郎，船木悦子，宮下真知子，盛野弘，吉川靖子，吉沢克則，吉久恵子

整理

上田順子，越砺為子，小熊冷子，工幸子，島田英子，新田貴子，船木悦子，松井弘子，宮下真知子，向しみ子，村上芙貴子，山本慎子，吉川靖子，吉久恵子

目　　次

序・例言・目次

Ⅰ　序　　説 …… 1

1．遺跡概観 …… 1

2．調査経過 …… 3

Ⅱ　調査概況 …… 7

Ⅲ　遺　　構 …… 11

1．土坑 …… 11

2．溝 …… 15

3．凹地 …… 18

Ⅳ　遺　　物 …… 19

1．土器・陶磁器 …… 19

2．その他の遺物 …… 27

Ⅴ　結　　語 …… 29

1．遺構 …… 29

2．遺物 …… 30

挿　図　目　次

第1図　遺跡位置図（1/5万） …… 1

第2図　遺跡地図（1/2万5千） …… 2

第3図　調査地区位置図（1/5,000） …… 4

第4図　昭和61年度本調査地区全体図（1/400） …… 5

第5図　試掘調査風景 …… 6

第6図　本調査地区全体図（1/400） …… 7

第7図　本調査地区遺構図〔1〕(1/200) …… 8

第8図　本調査地区遺構図〔2〕(1/200) …… 9

第9図　土坑実測図（1/80） …… 12

第10図　SD11実測図（1/200） …… 16

第11図　SD11断面図（1/80） …… 17

第12図　骨鏃実測図（実大） …… 27

第13図　骨鏃（約実大） …… 27

図　面　目　次

図面１　遺物実測図（弥生土器）
図面２　遺物実測図（弥生土器）
図面３　遺物実測図（弥生土器）
図面４　遺物実測図（土師器）
図面５　遺物実測図（土師器）
図面６　遺物実測図（土師器・須恵器）
図面７　遺物実測図（珠洲）
図面８　遺物実測図（珠洲）
図面９　遺物実測図（珠洲）
図面10　遺物実測図（珠洲）
図面11　遺物実測図（珠洲）
図面12　遺物実測図（土師器・陶磁器）
図面13　遺物実測図（石製品）
図面14　遺物実測図（土製品・石器）

図　版　目　次

図版１　遺構　１．調査地区近景（西）
　　２．調査地区近景（東）
図版２　遺構　１．ＳＤ11西半部全景（南東）
　　２．ＳＤ11全景（西）
図版３　遺構　１．ＳＤ11西部近景（南西）
　　２．ＳＤ11西部近景（北西）
図版４　遺構　１．ＳＤ11北西隅部近景（北東）
　　２．ＳＤ11南部近景（東）
図版５　遺構　１．ＳＤ11土層断面〔Ａ〕（南）
　　２．ＳＤ11土層断面〔Ｂ〕（南）
図版６　遺構　１．ＳＤ11土層断面〔Ｃ〕（南）
　　２．ＳＤ11土層断面〔Ｄ〕（北）
図版７　遺構　１．ＳＤ12全景（東）
　　２．ＳＤ15全景（南）
図版８　遺構　１．試掘調査地区東側全景（西）
　　２．試掘調査地区西側全景（東）
図版９　遺物　１．弥生土器・鉢
　　２．弥生土器・壺
　　３．弥生土器・甕
図版10　遺物　１．弥生土器・壺
　　２．弥生土器・甕
　　３．東日本系の弥生土器
図版11　遺物　１．弥生土器・甕
　　２．弥生土器・甕
図版12　遺物　土師器
図版13　遺物　土師器，須恵器
図版14　遺物　１．珠洲・鉢
　　２．珠洲・鉢
図版15　遺物　１．珠洲・鉢
　　２．珠洲・壺・甕
図版16　遺物　１．珠洲・甕
　　２．珠洲・甕
図版17　遺物　土師器，陶磁器
図版18　遺物　土製品，石製品，石器

別　表　目　次

別表１　土器・陶磁器観察表……22～26
別表２　土製品等観察表……28

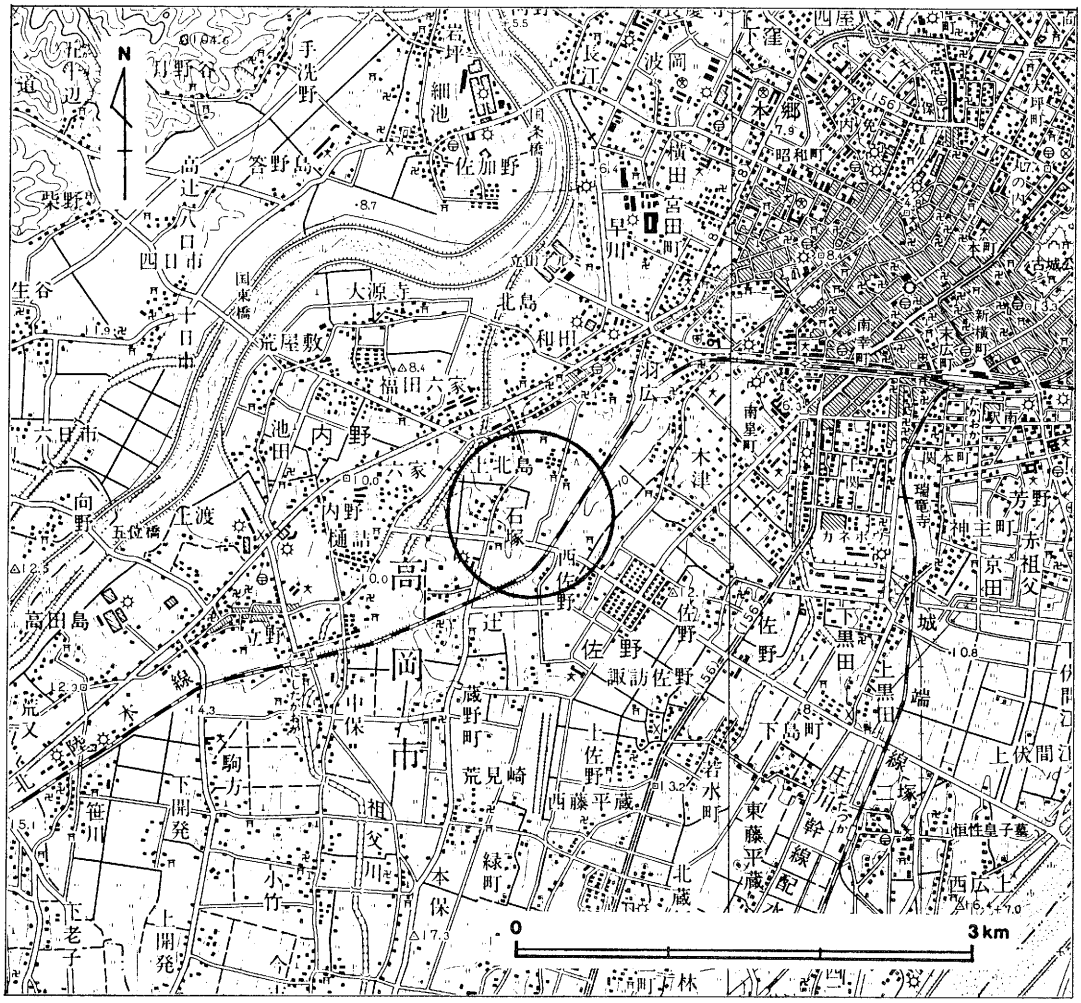
Ⅰ 序　説

1．遺跡概観

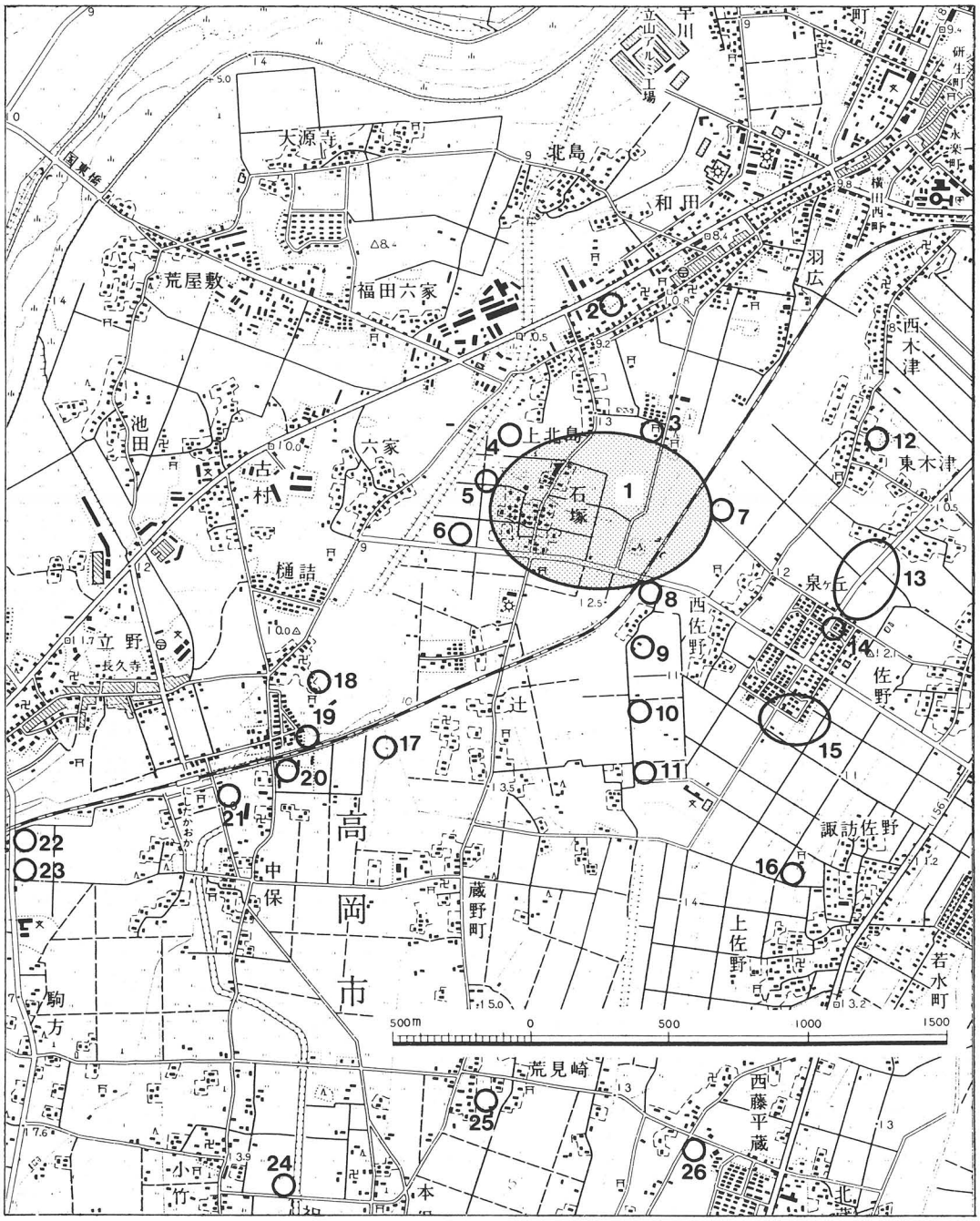
遺跡の位置

石塚遺跡は，ＪＲ西日本高岡駅の西南西約3.0km，西高岡駅の北東約1.8kmの地点に位置する。高岡駅と西高岡駅とを結ぶ北陸本線は，当遺跡推定範囲の東端部を南北に走っている。

県西部の大河，庄川は高岡市域の東部を北流して富山湾へ注いでいる。これは，天正13年（1585年）の地震による新しい流れ，そして加賀藩による寛文10年（1670年）から正徳４年（1714年）



第１図　遺跡位置図（１/５万）



第2図　遺跡地図（1/2万5千）

1．石塚遺跡，2．下北島住吉遺跡，3．北島遺跡，4．石塚江之戸遺跡，5．石塚五俵田遺跡，6．石塚蜻保遺跡，7．石名瀬B遺跡，8．石名瀬C遺跡，9．和田寺野遺跡，10．石名瀬A遺跡，11．西佐野千代遺跡，12．西木津遺跡，13．東木津遺跡，14．泉ヶ丘遺跡，15．下佐野遺跡，16．諏訪（上佐野）遺跡，17．辻遺跡，18．樋詰遺跡，19．中保C遺跡，20．中保A遺跡，21．中保B遺跡，22．立野地頭田遺跡，23．千鳥ヶ丘遺跡，24．小竹遺跡，25．荒見崎村内遺跡，26．西藤平蔵遺跡

まで44年間に亘る大工事により流路が固定してから以降のことである。近世初期には千保川筋が本流であり，これ以前には，より西方を流れ，大扇状地を形成しつつ奔放して，小矢部川へと合流していた。

当遺跡はこの庄川扇状地の末端部に立地している。東側に和田川，西側に祖父川の流れを見るが，扇状地特有の湧水を水源とする河川である。

当遺跡一帯は，縄文時代晩期以来数々の遺跡の所在地として知られている。縄文時代晩期の遺跡は，１．石塚屋敷田遺跡（当石塚遺跡の南東隅部），２．下北島住吉遺跡，４．石塚江之戸遺跡，５．石塚五俵田遺跡，６．石塚蜻保遺跡，14．泉ケ丘遺跡，17．辻遺跡，20．中保Ａ遺跡等である。当石塚遺跡は弥生時代中期の遺跡として著名であり，その他弥生時代の遺跡としては，９．和田寺野遺跡，15．下佐野遺跡，20．中保Ａ遺跡，25．荒見崎村内遺跡等が知られている。これ以降，土師器・須恵器の出土地・散布地，すなわち，古墳時代から奈良・平安時代にかけての遺跡として，７．石名瀬Ｂ遺跡，10．石名瀬Ａ遺跡，12．西木津遺跡，13．東木津遺跡等があり，上記した弥生時代の各遺跡からも，土師器・須恵器が出土している。東木津遺跡については，昭和62年３月に発掘調査を行った。宅地造成に伴う狭い面積の調査であったが，溝が一条検出された。

既往の調査

石塚遺跡における最初の本格的発掘調査は，昭和43年，高岡工芸高校地歴クラブＯＢ会によるものである。これはその前年，農地改善事業の折，遺物が出土したことによる。調査地点は，今回の調査地区（第３図のＢ）の南西約200ｍに位置する。この調査では，径14ｍの環状遺構と10個のピット状遺構が検出された。ピット状遺構は弥生時代のもので，1.5ｍ余りの長方形･円形・不定形等のものや，くるみ貯蔵用のものである。本調査以前にも同様なものが数個確認されている（上坂・上野1968）。

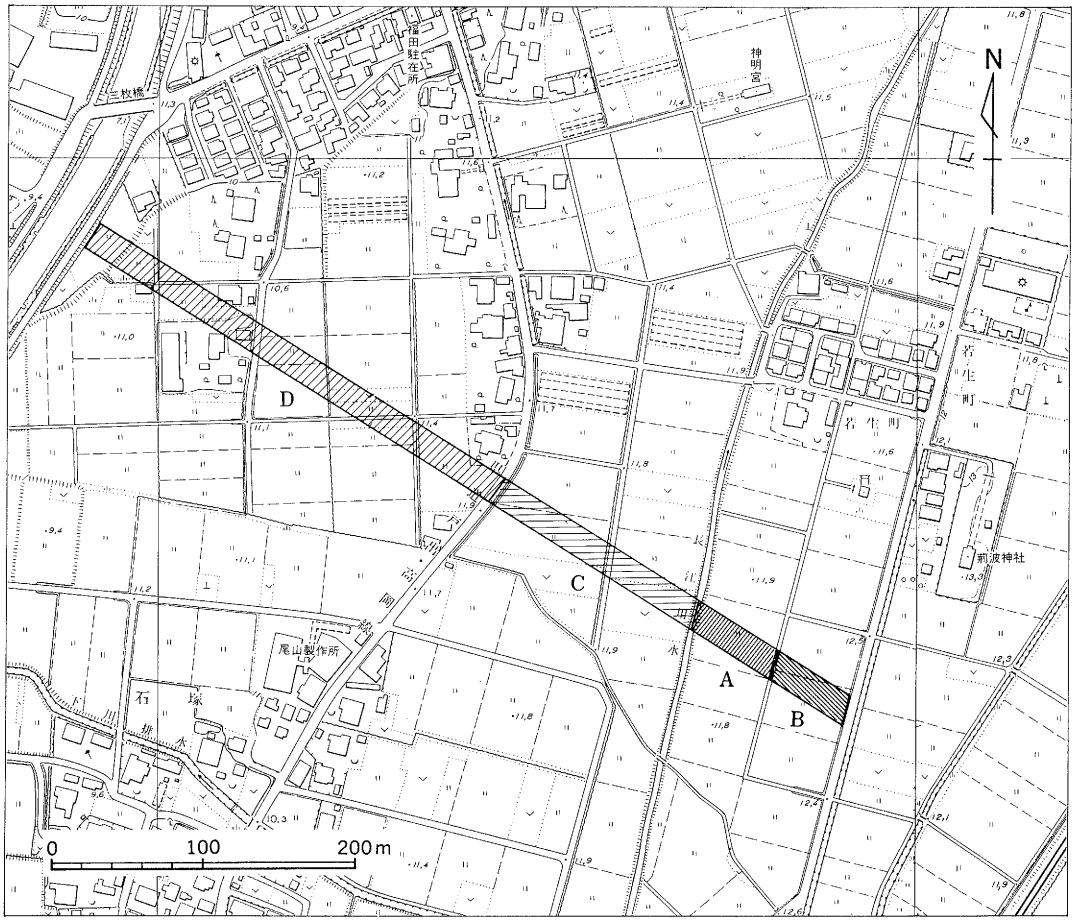
昭和55年から昭和58年にかけて，高岡市教育委員会によって数次に亘り発掘調査が行われた。これは，宅地造成や県営ほ場整備事業に先立って行われたものである。宅地造成に伴う調査は，昭和56年に実施された。今回の調査地区の南約300ｍに位置する。ピット状遺構（土坑）52基，溝６条等が検出された。遺物は，弥生時代中期の土器を中心とするものである。県営ほ場整備事業に伴うものは，今回の調査地区の，東側・南側一帯を広範囲に行ったものである。

２．調査経過

調査に至る経緯

都市計画道路―下伏間江・福田線は，高岡問屋センターの南側，下伏間江地内より，西方へ向い，福田地内の国道８号線へ至るものである。ＪＲ西日本高岡駅の南約1.5km付近を東西に走る幅

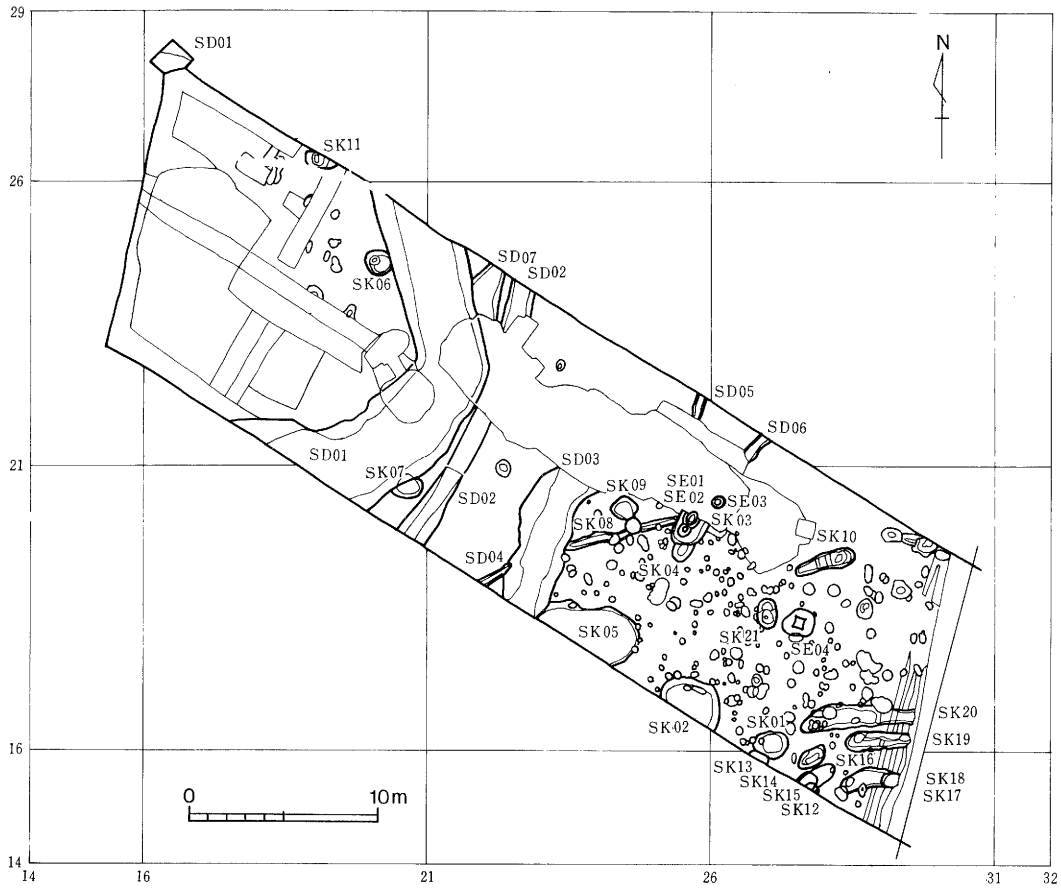
員18mの道路として築造されつつある。昭和59年度の工事中，石塚遺跡の推定範囲北側より，土器が出土し，石塚遺跡の範囲が拡がることが予想された。よって，昭和60年度に当面の道路築造予定地の試掘調査を実施した。北陸本線の西方，荊波（うばら，やぶなみ）神社の西側を走る市道より，主要地方道・高岡環状線（旧県道戸出・高岡線）まで約270m，対象面積約4,680m²である。この内容については，すでに報告した通りである（大野1986）。対象地のほぼ中央に長江用水が流れ，ここを境に，東側を前期調査地区（第3図のA・B）とし，西側を後期調査地区（第3図のC）と区分して実施した。その結果，前期調査地区は遺構・遺物が豊富であるのに対し，後期調査地区は遺物が散出する程度であった。このことより，前期調査地区を本調査するに至り，昭和61年度に実施した。



第3図　調査地区位置図（1/5,000）

A―昭和61年度本調査地区・昭和60年度前期試掘調査地区，C―昭和60年度後期試掘調査地区

B―昭和62年度本調査地区・昭和60年度前期試掘調査地区，D―昭和62年度試掘調査地区



第４図　昭和61年度本調査地区全体図（１/400）

昭和61年度の調査

調査対象地は，市道より長江用水までの間110ｍ，面積1,980㎡である。中央に用水が通っていることと排土の関係上，西側を前期調査地区（第３図のＡ）として先に行い，東側を後期調査地区（第３図のＢ）として後に回した。ただし，バックフォーによる表土除去は，場外へ搬出することとして両地区同時に実施することにした。試掘調査の結果では，前期調査地区の方が遺構が少なく，後期調査地区の方が多く時間もかかると予想されるものであった。しかし，前期調査地区において予想を上回る遺構が見られ，また多大の攪乱に手こずった。予定期間内に調査を終了させることが困難となった。関係機関との協議のすえ，前期調査のみ終了させ，後期調査地区は明年度に調査を実施することに決定した。調査の成果については，先に概要を報告した（山口1987)。調査面積は730㎡である。検出された遺構は，井戸址４基，土坑21基，溝７条である。井戸址はすべて中世のものである。内訳は，曲物積上げ井戸３基，縦板組隅柱横桟どめ井戸１基である。土坑・溝は弥生時代及び中世のものである。

第５図　試掘調査風景

昭和62年度の本調査

調査対象地は，昭和61年度に後期調査地区（第３図のＢ）として予定していた部分である。市道より用水までの間55ｍ，面積990㎡である。昭和61年度の調査において，表土を除去し，攪乱の中のコンクリートブロックも大部分バックフォーで搬出しておいた。よって，一部の盛土（排土）の除去と攪乱の掘り足りない部分の除去から開始し，すみやかに遺構の確認作業へと移行し得た。調査期間は６月８日から８月28日までで，調査面積は750㎡である。

昭和62年度の試掘調査

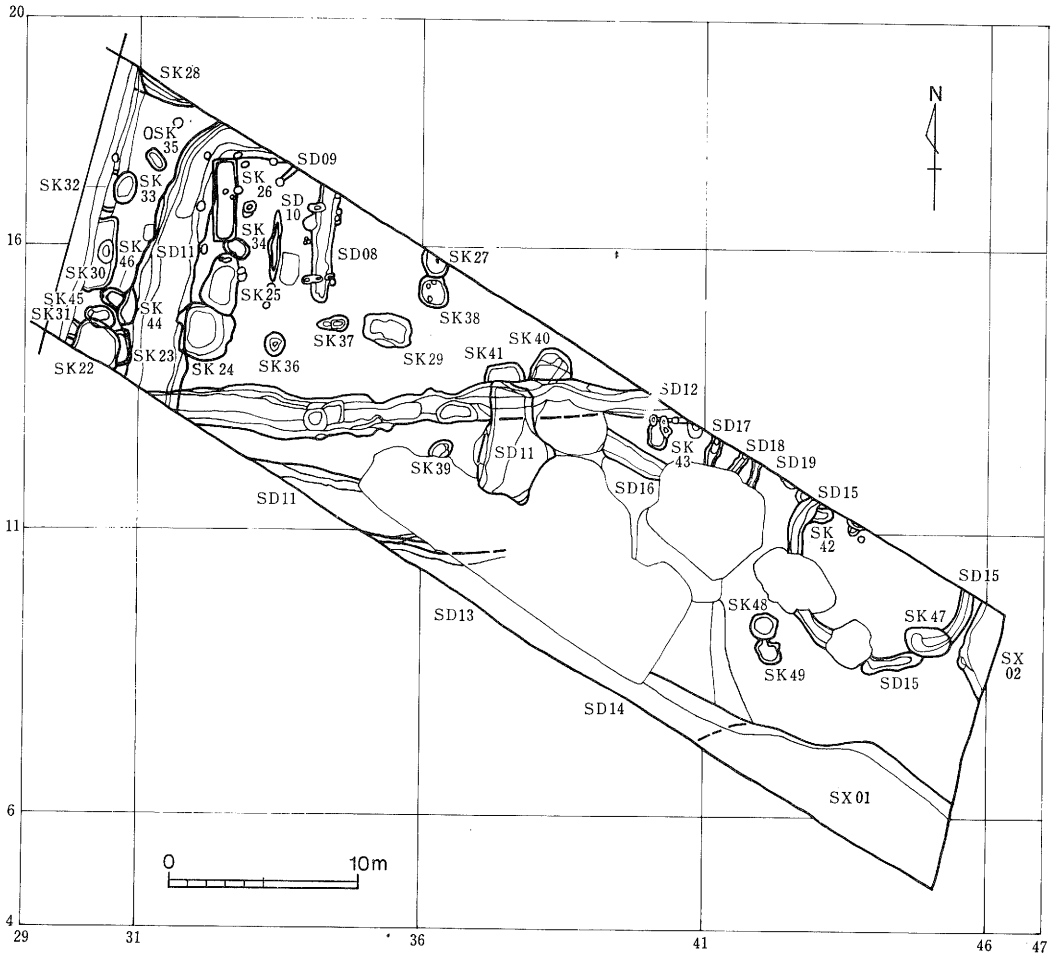
都市計画道路－下伏間江・福田線は，昭和60年度試掘調査対象地より北西方へ延び，祖父川を超えて国道８号線へ至るが，昭和62年度の試掘調査対象地は，主要地方道・高岡環状線より祖父川まで約300ｍ，対象面積約5,400㎡である。調査期間は11月９日から12月１日までである。

幅員18ｍの道路予定地が対象であり，トレンチの設定は幅２ｍで２条とした。中央の８ｍと両端の各３ｍを除く４ｍ分を掘り下げた。トレンチの総延長は354ｍとなり，発掘調査面積は708㎡を計る。調査の方法は、バックフォーにより表土（耕作土）を除去した後，人力でトレンチを整え，遺構の有無を確認することにした。その結果，遺構は存在しなく，遺物も土器・陶磁器類の細片が極く少量出土したのみで，遺跡の範囲外であることがわかった。調査の状況については，第５図と図版８の写真を参照にされたい。

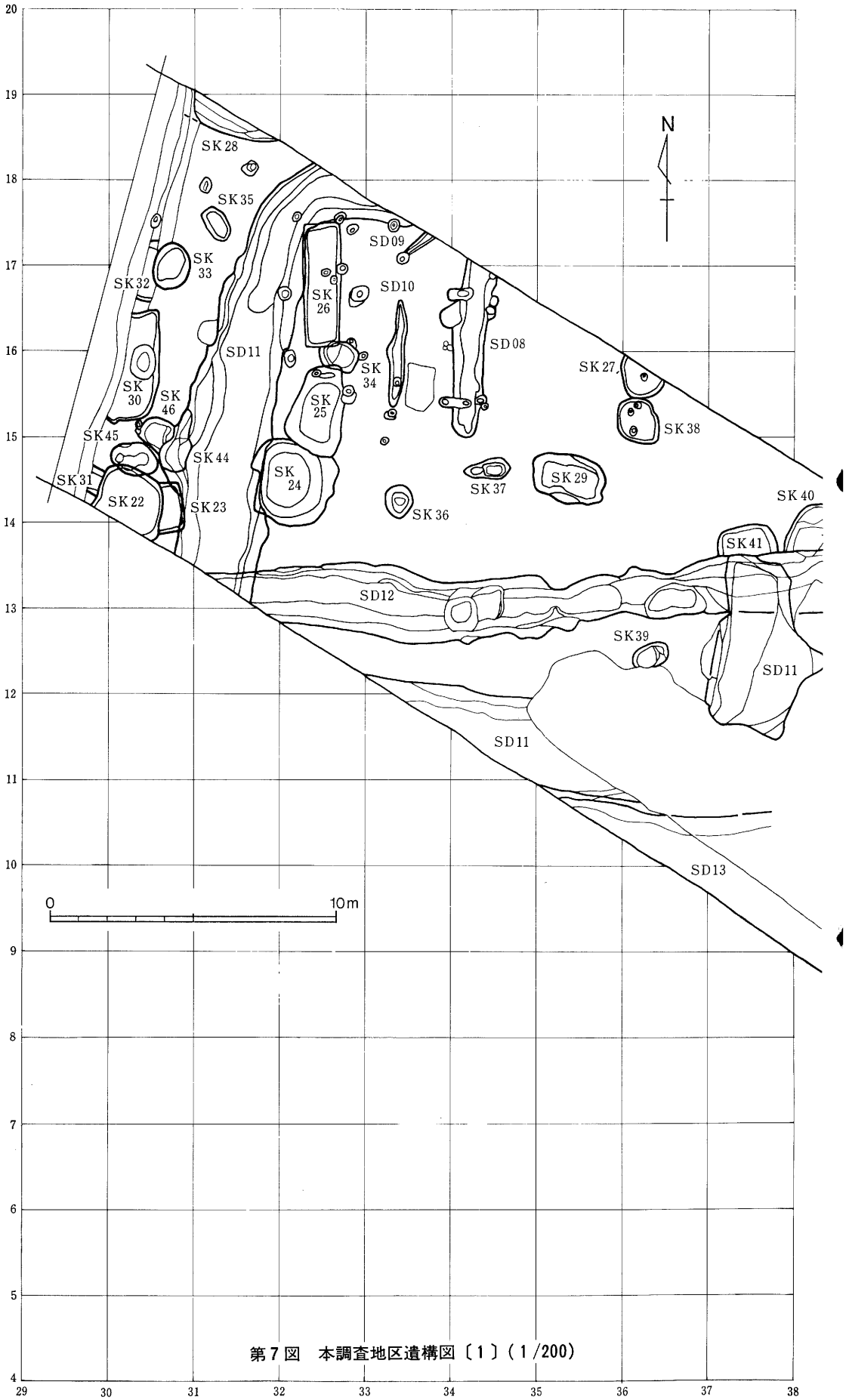
Ⅱ　調査概況

調査地区

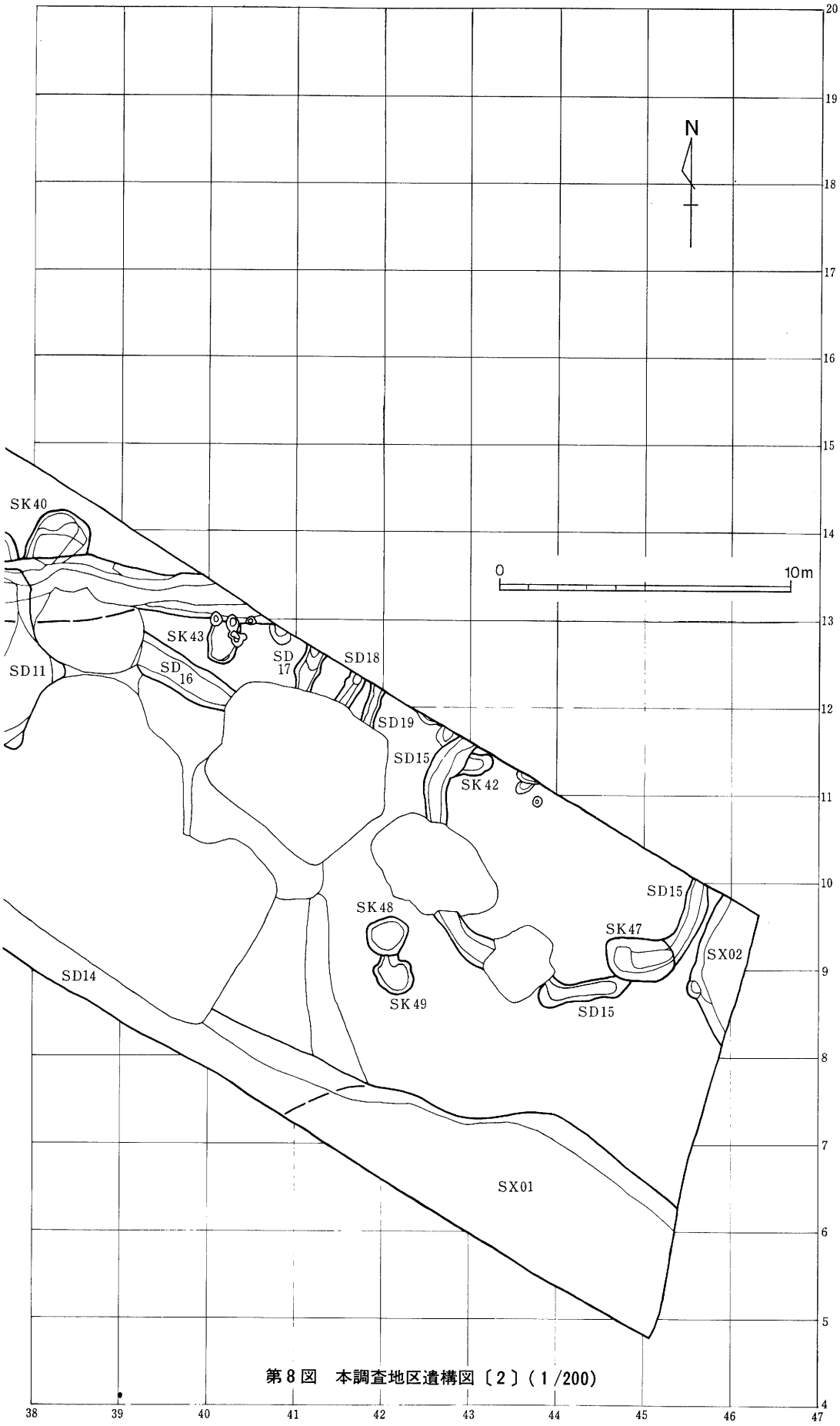
調査対象地は，昭和61年度調査地区の南東側隣接地990m²である。道路築造予定地であるので，幅18m，長さ55mに亘る長方形の敷地である。周囲は水田で，農地改善事業やほ場整備事業が既に実施されており，平坦な地形となっている。調査地区の中央部南側には大きな攪乱が存在した。これは昭和41年～43年の農地改善事業に伴うもので，コンクリートブロックが多量に埋めてあった。この攪乱は，昨年度にバックフォーにより掘り上げたので，今回は数日を費やして，残土の搬出を行った。ここより水が湧きでるため，調査は水中ポンプにより排水を常時行いながらのものとなった。



第６図　本調査地区全体図（１/400）



第７図　本調査地区遺構図〔１〕（１/200）



第８図　本調査地区遺構図〔２〕（１/200）

層位

基本層序は，20～50cmの耕作土の下は，直接淡黄白色砂質土の地山に達するものである。この間に，灰色や灰褐色土層が部分的に認められた。中世の包含層である。地山は，淡黄白色砂質土の下は，50～70cmで淡黄白色粘質土となり，さらに礫層へと至るものである。

グリッドの設定

グリッドの割り付けの基準として，平面直角座標系の第７座標系（原点は北緯36°00′00″・東径137°00′00″）を利用した。１辺３ｍ四方を一つの区画となし，東西をＸ軸，南北をＹ軸とした。そして，南西隅の数値がそのグリッドを表わすものとした。数値は昨年度の調査地区より連続したものである。Ｘ＝１，Ｙ＝１の地点は，原点より，西へ16,180ｍ，北へ81,120ｍ向った位置である。

遺構

検出された遺構は以下の通りである。

土坑28基；ＳＫ22～49

溝12条；ＳＤ08～19

凹地２基；ＳＸ01・02

この他にピットが検出されたが，規則的配列を示さず，建物址と認定することはできなかった。遺構名は，昨年度のものに続いて命名した。

遺物

出土した遺物は以下の通りである。

土器；弥生土器，土師器（古墳時代前期，平安時代，中世），須恵器（平安時代）

陶磁器；珠洲，越前，瀬戸系灰釉，瀬戸系天目，中国産青磁，国産青磁

土製品；土製紡錘車，土錘，耳栓

石製品；勾玉（昭和60年度の試掘調査で出土），砥石

石器；石鏃，磨製石斧（太型蛤刃石斧，環状石斧），ピエスエスキーユ

骨角器；骨鏃

出土遺物の中心は土器・陶磁器である。その中では弥生土器が最も多い。今回の報告では，昭和60年度の試掘調査で出土したものも一部図化し，併せて示した。

Ⅲ 遺　構

1．土　坑

ＳＫ22

調査地区の北西端部（29・30，13・14）区で検出された。平面形は楕円形を呈し，規模は，長軸（南北）1.90m以上，短軸（東西）2.40m，深さ22cmを計る。南側は調査地区外となる。ＳＫ23・31・45を切っている。出土遺物は，弥生土器・珠洲・中世土師器である。

ＳＫ23

調査地区の北西端部（30，13・14）区で検出された。平面形は方形を呈し，長軸（南北)1.73m，短軸（東西）0.75m以上，深さ３cmを計る。ＳＫ22に切られている。ＳＤ11を切っている。出土遺物は，弥生土器である。

ＳＫ24

調査地区の北西部（31・32，13・14）区で検出された。平面形は楕円形を呈し，長軸2.85m以上，短軸2.60m，深さ58cmを計る。ＳＫ25に僅かに切られている。ＳＤ11を切っている。出土遺物は，弥生土器・珠洲・中世土師器，土製紡錘車，砥石である。

ＳＫ25

調査地区の北西部（32，14・15）区で検出された。平面形は楕円形を呈し，長軸3.08m，短軸1.78m，深さ36cmを計る。ＳＫ24・34，ピットを切っている。ＳＫ24との新旧は，切り合う部分が僅かなため，確実ではないが，当ＳＫ25が新しいものと判断した。出土遺物は，弥生土器・珠洲・中世土師器である。

ＳＫ26

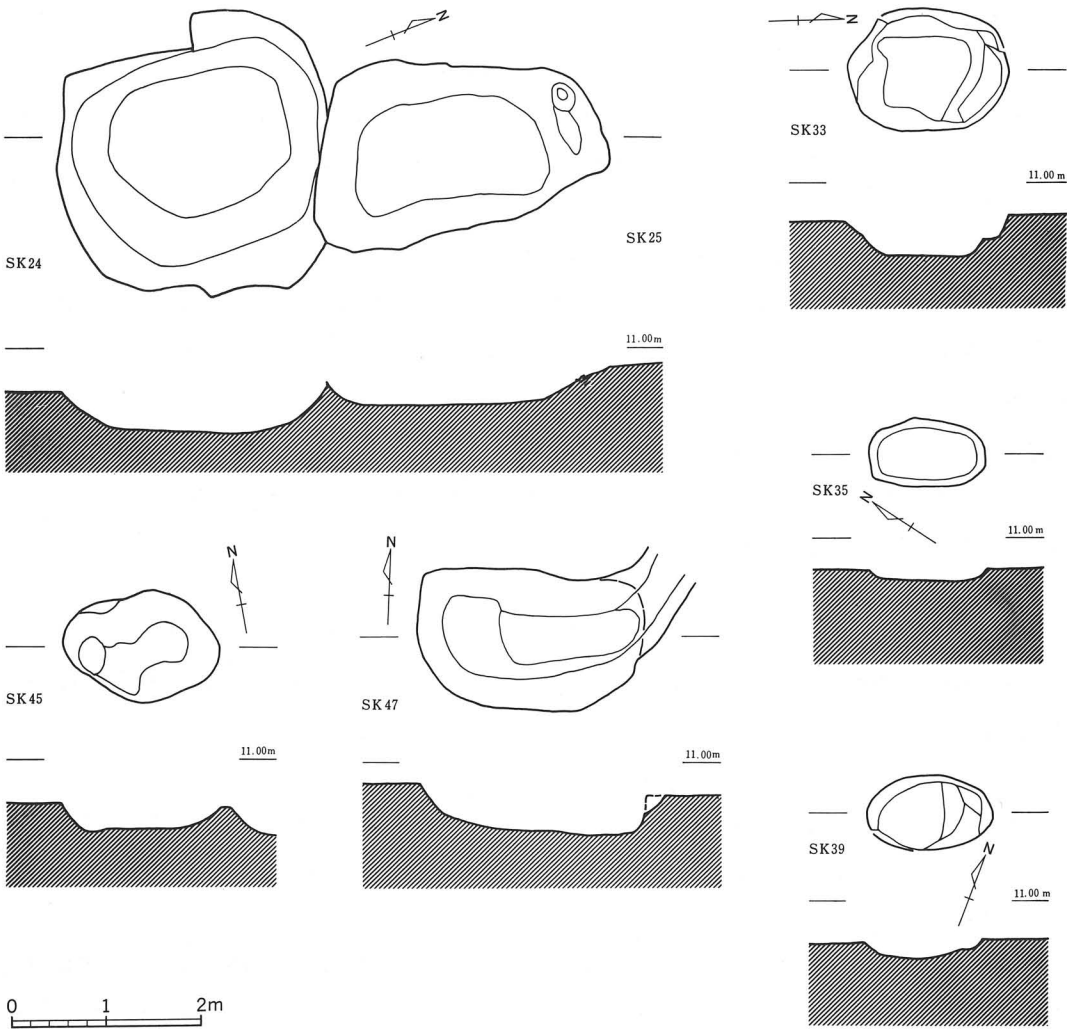
調査地区の北西部（32，16・17）区で検出された。平面形は長方形を呈し，長軸4.32m，短軸1.34m，深さ23cmを計る。ＳＫ34，ＳＤ11，ピットを切っている。端整な形を示し，底面は平坦である。

ＳＫ27

調査地区の北西部（36，15）区で検出された。平面形は楕円形を呈し，長軸1.44m以上，短軸1.42m以上，深さ６cmを計る。北東側は調査地区外となる。南側はＳＫ38とほぼ接している。出土遺物は，弥生土器である。

ＳＫ28

調査地区の北西隅部（31，18・19）区で検出された。比較的大型の土坑と推定されるが，調査地区外へ拡がり，一部分のみの検出のため，平面形は不明である。長軸（東西）3.65m以上，短軸（南北）0.90m以上，深さ28cmを計る。北東側は調査地区外となり，西側は攪乱に切られてい



第9図　土坑実測図（1/80）

る。出土遺物は，弥生土器である。

ＳＫ29

調査地区の北西部（34・35，14）区で検出された。平面形は楕円形を呈し，長軸2.53ｍ，短軸1.70ｍ，深さ22㎝を計る。出土遺物は，弥生土器である。

ＳＫ30

調査地区の北西端部（29・30，15・16）区で検出された。平面形は不整長方形と推定される。長軸3.90ｍ，短軸1.20ｍ以上，深さ16㎝を計る。大型のピットに中央東側を切られている。西側は攪乱に切られている。出土遺物は，弥生土器・珠洲である。

ＳＫ31

調査地区の北西端部（29，14）区で検出された。平面形は長方形ないし長楕円形と想定し得るが，一部分のみの検出であり，溝かもしれない。長軸（東西）0.90ｍ以上，短軸（南北）0.40ｍ，深さ７cmを計る。東側はＳＫ22に，西側は攪乱に切られている。出土遺物は，弥生土器である。

ＳＫ32

調査地区の北西端部（30，16・17）区で検出された。平面形は楕円形と推定される。長軸（南北）2.07ｍ，短軸（東西）0.25ｍ以上，深さ28cmを計る。ＳＫ33に切られている。また，東側・西側とも攪乱に切られている。出土遺物は，弥生土器である。

ＳＫ33

調査地区の北西端部（30，16・17）区で検出された。平面形は楕円形を呈し，長軸1.70ｍ，短軸1.23ｍ以上，深さ43cmを計る。西側は僅かに攪乱に切られている。ＳＫ32を切っている。出土遺物は，弥生土器である。

ＳＫ34

調査地区の北西部（32，15・16）区で検出された。平面形は楕円形を呈し，長軸1.40ｍ，短軸0.93ｍ，深さ34cmを計る。ＳＫ25・26に切られている。小ピットを切っている。出土遺物は，弥生土器である。

ＳＫ35

調査地区の北西端部（31，17）区で検出された。平面形は楕円形を呈し，長軸1.23ｍ，短軸0.73ｍ，深さ13cmを計る。出土遺物は，弥生土器である。

ＳＫ36

調査地区の北西部（33，14）区で検出された。平面形は楕円形を呈し，長軸1.15ｍ，短軸0.97ｍ，深さ22cmを計る。小型の土坑であり，ピットとして扱った方がよいかもしれない。出土遺物は，弥生土器である。

ＳＫ37

調査地区の北西部（34，14）区で検出された。平面形は不整長楕円形を呈し，長軸1.55ｍ，短軸0.73ｍ，深さ17cmを計る。土坑としたが，ピットが連結した形態を呈し，ピット２個とした方がよいかもしれない。遺物は出土していない。

ＳＫ38

調査地区の北西部（35・36，14・15）区で検出された。平面形は楕円形を呈し，長軸1.65ｍ，短軸1.40ｍ，深さ13cmを計る。出土遺物は，弥生土器，環状石斧である。

ＳＫ39

調査地区の中央部（36，12）区で検出された。平面形は楕円形を呈し，長軸1.20ｍ，短軸0.80ｍ，深さ18cmを計る。南側は攪乱により僅かに切られている。小型だが，端正な形を示している。出土遺物は，弥生土器である。

ＳＫ40

調査地区の中央部（37・38，13・14）区で検出された。比較的大型の土坑で，平面形は楕円形と推定される。長軸（南北）1.95ｍ以上，短軸（東西）1.90ｍ以上，深さ20cmを計る。南側はＳＤ12に切られている。出土遺物は，弥生土器である。

ＳＫ41

調査地区の中央部（37，13）区で検出された。平面形は楕円形ないし隅丸方形と推定される。長軸（南北）1.10ｍ以上，短軸（東西）2.05ｍ以上，深さ12cmを計る。南側はＳＤ12に切られている。出土遺物は，弥生土器である。

ＳＫ42

調査地区の南東部（42・43，11）区で検出された。平面形は楕円形ないし不整楕円形と推定される。長軸（東西）1.15ｍ以上，短軸（南北）0.70ｍ，深さ16cmを計る。西側はＳＤ15に切られている。出土遺物は，弥生土器である。

ＳＫ43

調査地区の中央部（40，12）区で検出された。平面形は不整方形を呈し，長軸1.60ｍ，短軸1.20ｍ，深さ11cmを計る。数個の小ピットに切られている。北側はＳＤ12と接している。出土遺物は，弥生土器である。

ＳＫ44

調査地区の北西端部（30，14・15）区で検出された。平面形は不整楕円形と推定される。長軸（南北）2.30ｍ以上，短軸（東西）1.00ｍ以上，深さ64cmを計る。東側はＳＤ11に大きく切られている。南側はＳＫ23に僅かに切られている。またＳＫ46を切っている。出土遺物は，弥生土器である。

ＳＫ45

調査地区の北西端部（30，14）区で検出された。平面形は不整楕円形を呈し，長軸1.66ｍ，短軸1.15ｍ，深さ31cmを計る。ＳＫ22に切られている。出土遺物は，弥生土器である。

ＳＫ46

調査地区の北西端部（30，14・15）区で検出された。平面形は楕円形と推定される。長軸1.00ｍ以上，短軸1.03ｍ，深さ20cmを計る。東側はＳＫ44に切られている。また小ピットに切られている。出土遺物は，弥生土器である。

ＳＫ47

調査地区の南東端部（44・45，８・９）区で検出された。平面形は楕円形を呈し，長軸2.35ｍ，短軸1.53ｍ，深さ52cmを計る。環状溝のＳＤ15と重複するが，新旧は明確にし得なかった。出土遺物は弥生土器である。

ＳＫ48

調査地区の南東部（41・42，９）区で検出された。平面形は不整円形を呈し，径1.35～1.45ｍ，

深さ21cmを計る。ＳＫ49を切っている。出土遺物は，弥生土器，耳栓である。

ＳＫ49

調査地区の南東部（41・42，８・９）区で検出された。平面形は不整楕円形を呈し，長軸1.50ｍ，短軸1.23ｍ，深さ12cmを計る。ＳＫ48に切られている。出土遺物は，弥生土器である。

２．溝

ＳＤ08

調査地区北西部北側で検出された南北に走る溝。規模は，長さ6.3ｍ以上，上面幅0.80～1.15ｍ，底面幅0.45～0.65ｍ，深さ35cmを計る。北側は調査地区外となる。攪乱や小ピットに切られている。溝の断面形はコ字形に近いものとなっている。覆土は上下２層に分かれる。上層は淡黄白色粘質土の，地山ブロックが主体となり，下層は暗灰褐色土が主体で，地山ブロックが混じっている。ピットの内，長楕円形になるものは，当溝に関係するものかもしれない。出土遺物は，珠洲である。

ＳＤ09

調査地区北西部北側で検出された北東～南西に走る溝。規模は，長さ1.10ｍ，幅25～35cm，深さ12cmを計る。北側は調査地区外となり，南側はピットに切られている。遺物は出土していない。

ＳＤ10

調査地区北西部北側で検出された南北に走る溝。規模は，長さ3.70ｍ，幅35～55cm，深さ５cmを計る。１箇所小ピットにより切られている。やや屈曲して延びる浅い溝である。出土遺物は，珠洲である。

ＳＤ11

調査地区北西部で検出された大溝で，方形に廻るものと想定される。北西端部でＬ字状に屈曲する溝として検出された当溝は，北西部南寄りで検出された部分へ繋がるものと判断した。また，この部分は，攪乱に切られているが，調査地区中央部を南北へ延びる溝へ続き，Ｌ字状に折れ曲がるものと判断した。以上のことより，全体を検出したわけではないが，方形に廻る溝と想定した。規模は，上面幅1.8～3.9ｍ，底面幅0.8～3.0ｍ，深さ78cmを計る。ＳＫ23・24・26，ＳＤ12に切られ，ＳＫ44を切っている。

この溝の土層断面図は第11図に示した通りである。断面の位置は平面図の第10図に示した。土層は基本的に次のように区分される。

第Ⅰ層；第１～３層。第２層の黒色粘質土を中に，上下に黒灰色粘質土が見られる。

第Ⅱ層；第４・４′・４″層。暗灰色粘質土が中心の土層。

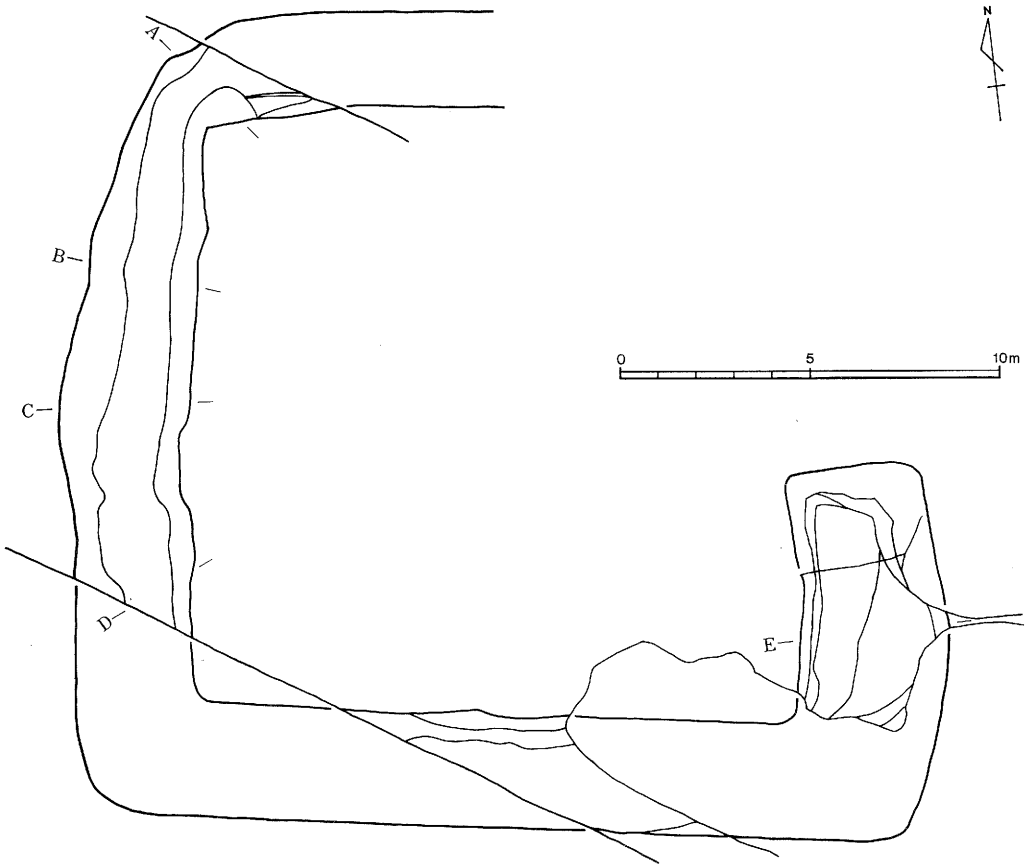
第Ⅲ層；第５・６層。基盤層のブロックである淡黄白色粘質土が中心の土層。

第Ⅰ・Ⅱ層は基盤層と明らかに異なり，溝として掘削されている部分が明確であった。これに対して，第Ⅲ層は明確ではなく，基盤層であるか，掘削後の埋土・覆土であるか判断しかねる部分もあった。発掘調査に当たっては，第Ⅱ層と第Ⅲ層の間に一つの面が存在するものと考え，第Ⅱ層を掘り上げた後，一旦掘り下げを止め，記録を取った。その後，さらに掘り下げ，溝を掘り上げた。

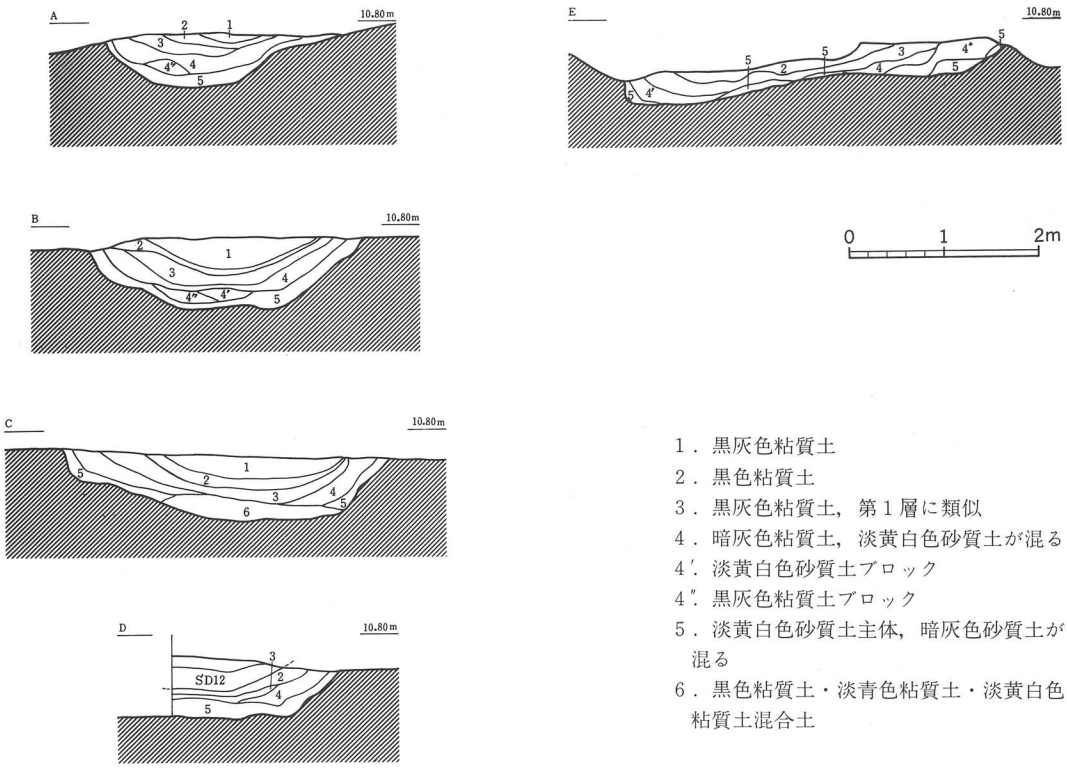
第Ⅲ層については，基盤層のブロックが中心と言うこともあり，溝掘削後，あまり時を置かず，埋ったものか，あるいは人為的に埋められたものと考えられる。後者の場合は，溝の形を整える意味でなされたと解釈されよう。第Ⅱ層からは，自然樹木も出土した。第Ⅰ層については，自然堆積の土層としてよかろう。

方形に廻る溝であるので，方形周溝墓や方墳になる可能性もある。想定ラインを加味した規模は，内辺で，南北16.0m×東西16.0m，外辺で，南北21.5m×東西23.0mとなる。

出土遺物は，弥生土器・古式土師器，土製紡錘車，石鏃・ピエスエスキーユである。



第10図　ＳＤ11実測図（1/200）



第11図　ＳＤ11断面図（1/80）

ＳＤ12

調査地区の中央北寄りで検出された溝。調査地区を斜めに横断する形で，東西に走る。規模は，長さ29.0ｍ以上，幅1.3～2.5ｍ，深さ41cmを計る。東側と西側は調査地区外となる。溝の西部は，攪乱・ピットに切られている。ＳＫ40・41・43，ＳＤ11を切っている。出土遺物は，弥生土器・珠洲・越前・中世土師器，石鏃・太型蛤刃石斧である。

ＳＤ13

調査地区の中央南寄りで検出された溝。東西に走るものと推定している。規模は，長さ7.4ｍ以上，幅1.5ｍ以上，深さ約１ｍを計る。北側には大きな攪乱があり，南側は調査地区外となる。ＳＤ11の南側に接しており，ＳＤ11と類似した溝である。出土遺物は，弥生土器（古式土師器）である。

ＳＤ14

調査地区の中央南寄りで検出された溝。北西～南東に走るものと推定している。規模は，長さ5.0ｍ以上，幅2.4ｍ以上，深さ約１ｍを計る。北側には大きな攪乱があり，南側は調査地区外となる。南東側はＳＸ01へ続く。出土遺物は，弥生土器，古式土師器である。

ＳＤ15

調査地区南東部北側で検出された環状に廻る溝。Ｕ字溝で，規模は，幅70～110cm，深さ28cmを計る。全面的に検出していないが，環状に廻るものと判断した。北側は調査地区外となる。比較的大きな攪乱で２箇所切られている。ＳＫ47と重複するが，新旧は不明である。ＳＫ42，ピットを切っている。出土遺物は，弥生土器である。

ＳＤ16

調査地区中央部北側で検出された北西～南東に走る溝。規模は，長さ3.8ｍ以上，幅0.80～1.3ｍ，深さ24cmを計る。北西側と南東側は攪乱に切られている。出土遺物は，弥生土器である。

ＳＤ17

調査地区中央部北側で検出されたほぼ南北に走る溝。規模は，長さ1.5ｍ以上，幅50～90cm，深さ20cmを計る。北側は調査地区外となり，南側は攪乱に切られている。出土遺物は，弥生土器である。

ＳＤ18

調査地区中央部北側で検出されたほぼ南北に走る溝。規模は，長さ1.1ｍ以上，幅50～60cm，深さ11cmを計る。北側は調査地区外となり，南側は攪乱に切られている。出土遺物は，弥生土器である。

ＳＤ19

調査地区中央部北側で検出されたほぼ南北に走る溝。規模は，長さ1.4ｍ以上，幅50～60cm，深さ10cmを計る。北側は調査地区外となり，南側は攪乱に切られている。出土遺物は，弥生土器である。

３．凹　　地

ＳＸ01

調査地区南東部の南東隅で検出された。遺構として扱っているが，自然の凹地が埋ったものと考えた。土坑や溝とするには，掘り込みが不明確で傾斜がなだらかである。一部分のみ検出され，調査地区外へと続く。北西側はＳＤ14へ続く。出土遺物は，弥生土器・平安時代の土師器・平安時代の須恵器・珠洲・中世土師器，骨鏃である。

ＳＸ02

調査地区南東部の北東隅で検出された。遺構として扱っているが，ＳＸ01同様，自然の凹地が埋ったものと考えた。一部分のみ検出され，調査地区外へと続く。出土遺物は，弥生土器である。

Ⅳ 遺　物

1．土器・陶磁器

弥生土器　図面１～３

弥生時代中期の土器である。27点図示した。内訳は，鉢４，壺６，甕17点である。弥生時代中期の遺構としては，土坑の内いくつかのものが該当する。これ以降の新しい時期の遺構からも弥生土器が出土している。

鉢　小型の鉢101～103と大型の鉢104である。いずれもしっかりした底部をもつ。103は小孔を２つ一組で付く，一箇所しか確認できないが，おそらく対称の位置にもう一組存在するものと考えられる。104は円孔を穿った耳部が２つ付く。上部を欠くが，鉢形の土器と想定した。

壺　口縁部片５点，底部片１点である。105・108・109は櫛描文が顕著である。105は，口頸部以下が残存しないが，外反して延びてきた口頸部が屈曲して立ち上がり，大きな口唇部を形成するものと理解している。108・109は外反して大きく開く口縁部となっている。106・107は頸部以下の形態が不明である。110は壺の底部と考えたものである。

甕　受口状の口縁部を示す125以外，通有の形態となり，緩やかに外反して拡がる口縁部の形態を示す。これらは文様の内容により以下のように分類できる。

Ａ類　111～119。施文せず全体的に刷毛目による調整が施されている。法量より，口径20cm余りを計る大型の111～115と口径15cm前後を計る小型の116～118に区分される。胴下・底部片である119は118と同一個体と考えられるものである。口端部の形態は，丸味を持って終わる111・112・115・116と口端部を強く横ナデすることにより，外傾する面を成す113・114・117・118の両者が見られる。

Ｂ類　120～122。口端部外面に刻目文を持つものである。大型品の120と小型品の121・122の両者がある。

Ｃ類　123・124。口端部内面に櫛描羽状烈点文が付く。大型品の123とこれよりやや小さく，中型品である124の２点である。後者には，口端部外面に刻目文が付く。

東日本系の弥生土器

図版10－３で，東日本系と考えられる土器を示した。土器・陶磁器類の写真は縮尺約３分の１であるが，これらは縮尺約２分の１である。ここ３箇年の試掘調査・本調査で出土したものである。128～134は縄文を施している。135～137は連弧文が付く。櫛描文が発達している中にあって異質な一群である。これらについては，以前，天王山系土器とし，東北系の土器と報じてきたのであるが，このように特定できるかどうか疑問に思われるので，ここでは，東日本系の弥生土器と広く理解しておき，今後十分に検討していきたい。

土師器〔1〕 図面4・5

いわゆる古式土師器である。13点図示した。内訳は，高杯4，壺3，甕5，甑1点である。高杯はすべて昭和60年度の試掘調査により出土したものである。他のものはＳＤ11出土品が中心で，206・210がＳＤ14より，211が表土より出土している以外，ＳＤ11からのものである。

高杯 201～204。すべて類以した形態を示す。杯部は底部より外面に鋭い稜をなし，外上方へ大きく開く。脚部は柱状部より屈曲して，裾部が外方へ大きく開く。調整手法については，磨滅しているものもあり，分明でない点もあるが次のように理解できる。横ナデを施す部分は，杯部の内面と稜より幾分上の口縁部外面までと脚部末端付近である。外面の底部・柱状部付近は，ナデ・指圧・ヘラナデによって整えられている。

壺 205～207。大型壺で複合口縁の205，小型壺の口縁部と考えた206，そして胴下・底部片の207である。205と207は丹塗りされている。

甕 208～212。一般的な大きさを示す208～210，小型甕の211，台付甕の212である。208～210はく字状口縁の甕である。弥生時代末から古墳時代前期において在在する甕においては，弥生時代後期以来の凹線文が付く複合口縁の甕（月影式の甕とされているもの等）や畿内的な口端部内面が肥厚する甕（いわゆる布留式の甕）のような特徴的なものではなく，単体で全体的な形態が不明では時期を特定しにくい甕ではあるが，弥生中期の甕とは明らかに形態を異にする点と，出土地点が異なるとは言え高杯201～204の存在，壺205の伴出を考慮して，古墳時代初期頃のものとした。

土師器〔2〕 図面6

平安時代の土師器である。9点図示した。内訳は，椀6，皿2，甕1点である。出土位置はＳＸ01が中心である。ここからは，301・302・305・307・308が出土している。303・306はＳＤ11からの出土であるが，ＳＤ11の東側からの出土である。この付近は，ＳＤ11より新しい溝や攪乱が錯綜しており，本来ＳＤ11に所属するものかどうか疑問である。

椀 301～306。すべてロクロ使用の製品である。法量より，口径12cm代の301～303とそれよりやや大きい304～306に2区分される。303・305は全面丹塗りされており，302・306には墨書が付く。底部の形態が判明するものは，いずれも無高台である。

皿 307・308。2点ともロクロ使用の無高台の皿である。307は全面丹塗りされている。308は不明確ながら，内面丹塗り，外面黒色の土器である可能性が強い。

甕 309。甕の口縁部片で，口端部を内方へ折り返すものとなっている。

須恵器 図面6

平安時代の須恵器である。4点図示した。すべて瓶類である。今回の調査において，須恵器の出土量は極めて少ない。401は双耳瓶である。肩部より上を欠損している。耳部は下方の基部のみ残存しており，形態は不明である。402は広口瓶，403は小型瓶で，いずれも口端部を欠損する。404は瓶類の底部と考えた。

珠洲　図面７～11

珠洲系陶器である。29点図示した。内訳は，鉢17，壺３，甕９点である。昭和60年度の試掘調査の時の出土品や表土出土品が中心である。遺構としては，ＳＤ12等である。

鉢　鉢は口縁部片10点，底部片４点，鉢形底部片３点である。口縁部片の口端部の形態を見ると，501～504の４点はバラエティーに富むものである。これに対して505～510の６点は，口端部が肥厚し口端面を形成している。水平になるものが中心で，508・510には櫛目波状文が廻る。底部片511～514はいずれも比較的密なオロシ目が付く。この内，514はオロシ目が直線的に底部に達しないものとなっている。鉢形底部片とした515～517は，壺の底部になる可能性があるものである。オロシ目は確認できず，底面は静止糸切り及びその可能性のあるものである。

壺　口縁部片２点，底部片１点で，518～520である。

甕　口縁部片521～529の９点である。小破片のため口径値が不確実なものもある。口頸部はく字状に折れ，口端部は肥厚する。鋭く折れるものもある。肩部が張るものが多い。529は例外で口頸部は胴部より直線的に続き，肥厚するものである。

土師器〔３〕　図面12

中世の土師器ですべて皿である。15点図示した。遺構からの出土は，ＳＫ22・24，ＳＤ12，ＳＸ01，ピットとなっている。

成形技法より，非ロクロの皿601～613とロクロ使用の皿614・615とに２区分される。法量からは，口径11.4～12.8㎝を計る比較的大型の皿である601～603と口径８㎝前後を計る小型の皿である604～615とに分けられる。

非ロクロの皿は以下のように分類される。

Ａ類．604～606。半球形ないしそれに近い形態を示す。

Ｂ類．607。非常に浅い形態の皿。

Ｃ類．608・609。弧状の底部より，直線的に外上方へ拡がるもの。

Ｄ類．601・610～612。弧状の底部より，外反して外上方へ拡がるもの。

Ｅ類．602・603・613。弧状の底部より，外上方へ開くもの。

調整手法については，磨滅していたり小破片であるため，厳密な観察に耐えないが，基本的に同一であり，次のように理解している。口縁部は内外面とも横ナデされ，内面の横ナデが底部に及ぶものもある。底部内面はナデであるが，口縁部からの横ナデがどの部分まで及ぶかはっきりしないものも多い。底部外面は指圧やナデによって形が整えられている。

陶磁器　図面12

中世から近世の陶磁器で，珠洲以外のものである。時期的には，709が近世のものである以外，中世のものである。越前701，瀬戸系灰釉702・703，瀬戸系天目704，青磁705～709の９点である。703は昭和60年度の試掘調査で出土したものと同一の破片が62年度の本調査で出土し，接合したものである。青磁は705～708が中国産青磁，709が近世の国産品である。

別表１　土器・陶磁器観察表

番　号	器　種	法量cm	特　　徴	出土位置
１．弥　生　土　器				
１０１ 図面１	鉢	16.6 8.4	口縁・体部は，内面が刷毛目の後，縦に指ナデ，外面が刷毛目。底部は，内面がナデ，外面が無調整。	表土。
１０２ 〃	〃	15.4 8.7	内面は，口縁部が横ナデ，体部が刷毛目，底部がナデ。外面は，口縁部が横ナデ，体上部が刷毛目，体下部が横ナデ，底部がナデ。	表土。
１０３ 〃	〃	13.6 10.7	口縁部に小孔が付く。口縁部は横ナデ。体上部は刷毛目。体下部はヘラ磨き。底部は，内面がヘラ磨き，外面がナデ。	表土。
１０４ 〃	〃	—— (15.9)	胴部に穿孔のある耳部が２箇所付く。胴部は，内面が刷毛目・ナデ，外面がヘラ磨き？	表土。
１０５ 〃	壺	22.0 (3.9)	口縁部は，内面が刷毛目，外面が２段の櫛描羽状烈点文とヘラ状具による刻目文。	ＳＤ11。
１０６ 〃	〃	18.2 (3.3)	口端部は横ナデ。口縁部は，内面が横ナデ，外面が刷毛目。	ＳＫ48。
１０７ 〃	〃	13.9 (3.6)	口端部は横ナデ。口縁部は，内面が横ナデで一部刷毛目，外面が刷毛目。	ＳＫ34。
１０８ 〃	〃	25.5 (14.1)	口端部は，内面が２段半の櫛描羽状烈点文，外面が櫛描刻目文。頸部に幅広の貼り付け突帯が一条廻り，櫛描格子烈点文が付く。	ＳＤ11。
１０９ 〃	〃	21.0 (3.7)	口端部は，内面が２段の櫛描羽状烈点文，外面が櫛描刻目文。口縁部は刷毛目。	表土。
１１０ 〃	〃	—— (7.1)	胴下部は，内面がナデ，外面が刷毛目・ナデ。	ＳＤ11。
１１１ 図面３	甕	23.4 (6.0)	口縁・頸部は刷毛目。外面に煤付着。	ＳＤ12。
１１２ 図面２	〃	23.2 (9.6)	口縁・胴上部は刷毛目。	ＳＫ40。 ＳＤ12。
１１３ 〃	〃	20.4 (9.5)	口端部は横ナデ。口縁部・胴上部は刷毛目。	ＳＤ14。
１１４ 〃	〃	20.5 (5.0)	口端部は横ナデ。口縁部は，内面が刷毛目・横ナデ，外面が刷毛目。	ＳＫ39。
１１５ 〃	〃	20.8 22.7	内面は，口縁部が横ナデ，胴上半部が刷毛目，胴下半部がナデ。外面は刷毛目。	ＳＤ12。
１１６ 〃	〃	15.8 (9.4)	内面は，口縁・頸部が刷毛目，胴上部がナデ。外面は，口端部が横ナデ，口縁・胴上部が刷毛目。外面に煤付着。	ＳＫ48。
１１７ 〃	〃	14.2 (7.1)	口端部は横ナデ。口縁部は刷毛目。	ＳＫ34。
１１８ 〃	〃	16.0 (11.6)	内面は刷毛目。外面は，口縁部が刷毛目・横ナデ，胴部が刷毛目。外面に煤付着。	60年試掘。
１１９ 〃	〃	—— (11.3)	胴下半部は刷毛目。底面は平滑。外面に煤付着。	60年試掘。
１２０ 図面３	〃	25.0 (12.3)	口端部は横ナデで刻目文。口縁部は刷毛目。胴上部は，内面がナデ，外面が刷毛目。	ＳＫ36。

番　号	器　種	法量cm	特　　徴	出土位置
121 図面3	甕	13.4 (9.6)	口端部外面に刻目文。口縁・胴部は，内面が磨滅しているが刷毛目？外面が刷毛目。外面に煤付着。	SD11。
122 〃	〃	15.8 (5.8)	口端部外面に櫛描烈点文。口縁・頸部は刷毛目・横ナデ。	SK33。
123 〃	〃	20.6 (5.1)	口端部内面に櫛描羽状烈点文。口縁・頸部は刷毛目・横ナデ。	SD11。
124 〃	〃	17.6 (7.5)	口端部は横ナデで，内面が2段の櫛描羽状烈点文，外面が刻目文。口縁・肩部は刷毛目，肩部内面に縦の指ナデ。外面に煤付着。	SD11。
125 〃	〃	13.2 (3.8)	口端部外面に櫛描羽状烈点文。外面に煤付着。	SD11。
126 〃	〃	—— (5.7)	胴下部は刷毛目。底部はナデ。	SD11。
127 〃	〃	—— (3.7)	胴下部は刷毛目。	SK48。
2．土　師　器〔1〕				
201 図面4	高杯	21.1 13.3	杯部―口縁部は横ナデ。底部は，内面が横ナデ，外面がナデ。脚部―柱状部は，内面がヘラ状具，外面がナデ。末端部は横ナデ。	60年試掘。
202 〃	〃	17.0 13.2	杯部―口縁部は横ナデ。底部は，内面が横ナデ，外面がナデ。脚部―柱状部は，内面がヘラ状具，外面がナデ。末端部は横ナデ。	60年試掘。
203 〃	〃	15.2 11.5	杯部―口縁部は横ナデ。底部は，内面が横ナデ，外面がナデ・指圧・ヘラ状具。脚部―内面は，刷毛状具・横ナデ。外面は，ナデ・ヘラ削り等。	60年試掘。
204 〃	〃	17.8 (4.0)	杯部―口縁部は横ナデ。底部は，内面が横ナデ，外面がナデ。	60年試掘。
205 〃	壺	13.6 (21.9)	口縁部はヘラ磨き・横ナデ。胴部は，内面がナデ，外面がヘラ磨き・横ナデ。口縁部と胴部外面は丹塗り。	SD11。
206 〃	〃	9.8 (3.9)	口端部は横ナデ。口縁部は刷毛目。	SD14。
207 〃	〃	—— (5.9)	胴下部はヘラ磨き。底部はナデ。外面は丹塗り。	SD11。
208 図面5	甕	15.2 (24.0)	口縁部は横ナデ。胴部は，内面が刷毛目・ナデ。外面が刷毛目。外面に煤付着。	SD11。
209 〃	〃	19.0 (20.1)	内面は，口端部が横ナデ，口縁部が刷毛目・横ナデ，胴部が刷毛目。外面は，口端部が横ナデ，口縁・胴部が刷毛目で一部ナデ。外面に煤付着。	SD11。
210 〃	〃	20.5 (6.8)	口縁・肩部は，内面が横ナデ，外面が刷毛目。	SD14。
211 〃	〃	12.7 (8.4)	内面は，口端部が横ナデ，口縁・頸部が刷毛目，胴上半部がナデ。外面は口縁部が横ナデ，胴上半部が刷毛目。	表土。
212 〃	〃	—— (2.5)	甕の台部。内面は刷毛目・横ナデ。外面はヘラ磨き・刷毛目・横ナデ？	SD11。
213 〃	〃	—— 3.1	甑の底部。底部中央に小孔が一つ付く。内面はナデ。外面は刷毛目。	SD11。
3．土　師　器〔2〕				
301 図面6	椀	12.4 4.0	ロクロ調整の後，底部は糸切りをする。	SX01。

番　号	器　種	法量cm	特　　徴	出土位置
302 図面6	椀	12.6 3.9	ロクロ調整の後，底部は糸切りをする。体部外面に墨書が付く。	SX01。
303 〃	〃	12.8 (4.0)	ロクロ調整をする。全面丹塗り。	SD11。
304 〃	〃	14.6 5.1	ロクロ調整の後，底部は糸切りをする。	60年試掘。
305 〃	〃	16.8 (5.3)	ロクロ調整をする。全面丹塗り。	SX01。
306 〃	〃	15.0 (4.4)	ロクロ調整をする。体部外面に墨書が付く。	SD11。
307 〃	皿	13.1 2.7	ロクロ調整の後，底部は糸切りをする。全面丹塗り。	SX01。
308 〃	〃	13.8 2.6	ロクロ調整の後，底部は糸切りをする。内面黒色？外面丹塗り？	SX01。
309 〃	甕	19.4 (4.4)	口端部は内方へ折り返され，肥厚している。	表土。
4．須　恵　器				
401 図面6	瓶	—— (20.8)	双耳瓶。	SX01。
402 〃	〃	—— (18.5)	広口瓶。胴下半部はヘラ削りする。口縁上部・底部中央は欠損している。	60年試掘。
403 〃	〃	—— (8.6)	小型瓶。胴下半部はヘラ削りする。胴上半部に3条の沈線文が廻る。	60年試掘。
404 〃	〃	—— (4.1)	瓶類の底部。	表土。
5．珠　　洲				
501 図面7	鉢	32.0 (5.0)	口端面は外傾する。オロシ目は確認できない。	表土。
502 〃	〃	32.8 (9.9)	口端部は直上方へ立ち上がり，口端面は水平になる。オロシ目は確認できない。	60年試掘。
503 〃	〃	32.4 (2.9)	口端部は尖まり，外上方へ拡がる。オロシ目は確認できない。	SK24。
504 〃	〃	32.2 (5.0)	口縁部は直線的に延び，口端部は肥厚して丸味を持つ。オロシ目を一部確認。	表土。
505 〃	〃	27.6 (5.6)	口縁部は内弯して延び，口端部はやや肥厚して，内傾する面をなす。オロシ目を一部確認。	60年試掘。
506 〃	〃	29.0 (5.4)	口縁部は直線的に延び，口端部は肥厚して，水平な面をなす。オロシ目を一部確認。	表土。
507 図面8	〃	26.0 (8.5)	口縁部は直線的に延び，口端部はほぼ水平な面をなす。オロシ目は8条で比較的密である。	表土。
508 〃	〃	44.2 (6.7)	口縁部は直線的に延び，口端部は肥厚して，ほぼ水平な面をなす。口端面には櫛目波状文が廻る。オロシ目は10～13条で密である。	60年試掘。
509 〃	〃	31.8 (5.0)	口縁部は直線的に延び，口端部は肥厚して，ほぼ水平な面をなす。オロシ目は11条で密である。	表土。

番　号	器　種	法量cm	特　　徴	出土位置
510 図面8	鉢	33.6 (6.7)	口縁部は直線的に延び，口端部は肥厚して，水平な面をなす。口端面には櫛目波状文が廻る。オロシ目は12条で密である。	60年試掘。
511 〃	〃	—— (10.6)	体部は内弯気味に外上方へ拡がる。底部は静止糸切り。オロシ目は11条で密である。	60年試掘。
512 図面9	〃	—— (6.2)	体部は内弯気味に外上方へ拡がる。オロシ目は13条で比較的密である。	SD19。
513 〃	〃	—— (2.6)	底部は静止糸切り。オロシ目は8・9条で比較的密である。	表土。
514 〃	〃	—— (4.6)	器壁が非常に厚い鉢の底部。底部は静止糸切り。オロシ目は密である。	SD08。
515 〃	〃	—— (5.6)	体部は内弯気味に外上方へ拡がる。	SX01。
516 〃	〃	—— (5.4)	体部は内弯気味に外上方へ拡がる。	SX01。
517 〃	〃	—— (4.4)	体部は直線的に外上方へ拡がる。底部は静止糸切り。	SD12。
518 〃	壺	20.0 (8.4)	口縁部は直線的に延びた後，外上方へ拡がる。口縁部は横ナデ。胴上部は，内面がナデ，外面が叩き目。	60年試掘。
519 〃	〃	14.6 (2.6)	口端部は丸味を持つ。	表土。
520 〃	〃	—— (7.0)	大型壺の底部。胴下部外面は叩き目。底部は横ナデで静止糸切り。	表土。
521 〃	甕	—— (9.0)	口頸部は緩く外反し，口縁部は肥厚する。胴上部外面には，細かい叩き目が平行に付く。	表土。
522 〃	〃	32.0 (7.5)	口縁部は外方へ折り返すようにして，肥厚する。胴上部外面には，細かい叩き目が平行に付く。	表土。
523 図面10	〃	49.0 (20.6)	口頸部は鋭く屈曲し，口縁部は外上方へ拡がる。胴上部外面には，細かい叩き目が平行に付く。	SK25, SD12他。
524 〃	〃	37.0 (13.4)	口頸部はく字状に屈曲し，口端部は角縁状に肥厚する。胴上部外面には，細かい叩き目が右下りに付く。	60年試掘。
525 〃	〃	46.6 (8.0)	口頸部はく字状に屈曲する。胴上部外面には，細かい叩き目が平行に付く。	60年試掘。
526 図面11	〃	67.0 (6.7)	口頸部は鋭く屈曲し，口端部は外反して開く。胴上部外面には，細かい叩き目が平行に付く。	60年試掘。
527 〃	〃	56.0 (5.9)	口頸部は鋭く屈曲し，口端部は玉縁状に肥厚する。胴上部外面には，細かい叩き目が平行に付く。	SD12。
528 〃	〃	51.0 (10.3)	口頸部は鋭く屈曲し，口端部は外上方へ直線的に拡がる。胴上部外面には，荒い叩き目が右下りに付く。	表土。
529 〃	〃	39.2 (13.9)	口頸部は極めて緩く屈曲し，口端部は角縁状に肥厚する。胴上部外面には，荒い叩き目が右下りに付く。	表土。
6．土　師　器〔3〕				
601 図面12	皿	11.6 (2.3)	非ロクロ土師器。弧状の底部より，外面に稜をなして，口縁部は外上方へ開く。内面と口縁部外面は横ナデ。底部外面はナデ。	ピット。
602 〃	〃	11.4 1.9	非ロクロ土師器。弧状の底部より，口縁部は外上方へ開く。内面と口縁部外面は横ナデ。底部外面はナデ。	表土。

番　号	器　種	法量cm	特　　徴	出土位置
603 図面12	皿	12.8 (2.5)	非ロクロ土師器。口縁部は直線的に外上方へ開く。口縁部は横ナデ。	SK22。
604 〃	〃	8.4 2.9	非ロクロ土師器。半球形の形態を示す。内面と口縁部外面は横ナデ。底部外面はナデ？	60年試掘。
605 〃	〃	8.5 (2.2)	非ロクロ土師器。半球形の形態を示す。内面と口縁部外面は横ナデ。底部外面はナデ？	60年試掘。
606 〃	〃	8.4 2.4	非ロクロ土師器。弧状の底部より，口縁部は内弯して外上方へ拡がる。内面と口縁部外面は横ナデ。底部外面はナデ？	表土。
607 〃	〃	8.2 (1.4)	非ロクロ土師器。弧状の底部より，口縁部は内弯気味に外上方へ拡がる。内面と口縁部外面は横ナデ。底部外面はナデ？	表土。
608 〃	〃	7.8 2.1	非ロクロ土師器。弧状の底部より，外面に稜をなして，口縁部は外上方へ拡がる。口縁部は横ナデ。底部はナデ。全面丹塗り。	表土。
609 〃	〃	8.0 2.4	非ロクロ土師器。弧状の底部より，口縁部は外上方へ拡がる。内面と口縁部外面は横ナデ。底部外面はナデ？	SD12。
610 〃	〃	7.7 2.2	非ロクロ土師器。弧状の底部より，口縁部は外反気味に外上方へ拡がる。口縁部は横ナデ。底部はナデ。	SK24。
611 〃	〃	9.0 2.4	非ロクロ土師器。弧状の底部より，口縁部は外反して外上方へ拡がる。内面と口縁部外面は横ナデ。底部外面はナデ。	60年試掘。
612 〃	〃	8.8 (1.8)	非ロクロ土師器。弧状の底部より，口縁部は外反して外上方へ拡がる。口縁部は横ナデ。底部はナデ。	ピット。
613 〃	〃	8.3 (1.7)	非ロクロ土師器。口縁部は直線的に外上方へ開く。口縁部横ナデ。	表土。
614 〃	〃	8.8 2.5	ロクロ土師器。口縁部は外上方へ開き，口端部はやや肥厚する。ロクロ調整の後，底部は糸切りをする。	SX01。
615 〃	〃	7.7 1.4	ロクロ土師器。口縁部は外上方へ開く。ロクロ調整の後，底部は糸切りをする。	表土。
7．陶　磁　器				
701 図面12	鉢	—— (3.5)	越前の擂鉢。	SD12。
702 〃	碗	15.8 (4.6)	瀬戸系の灰釉大平碗。	表土。
703 〃	香炉	10.6 4.5	瀬戸系の灰釉香炉。	60年試掘，表土。
704 〃	碗	—— 1.5	瀬戸系の天目茶碗。	表土。
705 〃	〃	16.8 (3.4)	中国産青磁。竜泉窯系。	表土。
706 〃	〃	14.6 (2.6)	中国産青磁。竜泉窯系。	表土。
707 〃	〃	15.4 (3.6)	中国産青磁。竜泉窯系。	表土。
708 〃	〃	16.8 (2.5)	中国産青磁。竜泉窯系。	表土。
709 〃	〃	—— (1.8)	国産青磁。	表土。

2．その他の遺物

土製品　図面14

土製紡錘車　弥生土器片再利用の紡錘車５点，801～805である。口径　4･5cm　前後に復原できる801～804とこれらより小型の805である。弥生時代中期のものとしてよいであろう。

土錘　土師質の土錘２点，806・807である。806は典型的な管状土錘である。これに対して807は球形になっている。

耳栓　808で土製の耳飾である。小型の臼形を呈する。内方へ抉られた形となり，さらに穿孔されている。中央部は凹み，内外面の径は異なる。

石製品　図面13

勾玉　809である。ひすい製の勾玉で，昭和60年度の試掘調査の時出土した。勾玉と称しているが勾玉の形態になっていない。勾玉になる前段の未製品としておきたい。

砥石　大小の砥石５点，810～814である。これらの内，810・813・814の３点は同様の石材から成っている。

石器　図面14

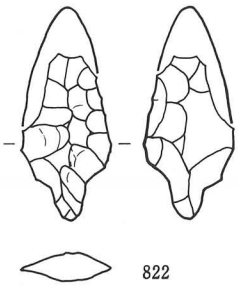
石鏃　815～818の４点である。無茎石鏃の815・816と有茎石鏃の817・818で，817の基部両面には磨痕が認められる。

磨製石斧　太型蛤刃石斧の819と環状石斧の820である。いずれもその破片である。

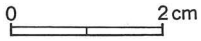
ピエスエスキーユ（楔形石器）　この石器については西井龍儀氏の御教示を得た。西井氏の原図により図示した821である。また，昭和61年度の調査での出土品の中にも存在しているとの指適も得た。図示していないが，ＳＤ01から出土したものである。

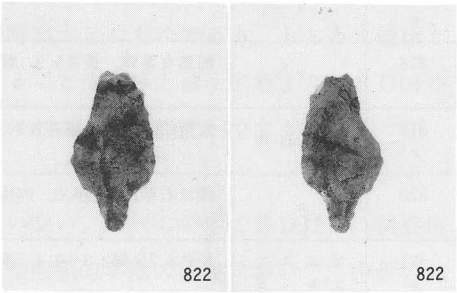
骨角器　第12図

骨鏃　822で骨鏃である。先端部を欠損している。



第12図　骨鏃実測図（実大）





第13図　骨鏃（約実大）

別表2　土製品等観察表

番　号	種　　類	特　　徴	出土位置
801 図面14	土製紡錘車	弥生土器片再利用の紡錘車。推測径5.0～5.2，厚さ0.2～0.5，推測孔径0.4cm。½残存。	ＳＤ12。
802 〃	〃	弥生土器片再利用の紡錘車。推測径4.6～4.8，厚さ0.4～0.5，推瀬孔径0.5cm。⅓残存。	ＳＤ11。
803 〃	〃	弥生土器片再利用の紡錘車。径4.6，厚さ0.3～0.5，孔径0.6～0.9cm。¾残存。	表土。
804 〃	〃	弥生土器片再利用の紡錘車。推測径3.7～3.8，厚さ0.3，推測孔径0.4～0.6cm。⅓残存。	ＳＫ24。
805 〃	〃	弥生土器片再利用の紡錘車。径2.2～3.2，厚さ0.3～0.5，孔徒0.4～0.6cm。完存品。	ＳＤ11。
806 〃	土　　錘	管状の土錘。長さ5.0，径3.2～3.8，孔径1.5～1.7cm。土師質。⅔残存。	表土。
807 〃	〃	偏球形の土錘。長さ3.9，径4.6，孔径1.5～1.9cm。土師質。完存品。	60年試掘。
808 〃	耳　　栓	臼形の耳栓。内径1.6，外径2.2，幅1.6，孔径0.3cm。完存品。	ＳＫ48。
809 図面13	勾　　玉	ひすいの勾玉の未製品。長軸1.9，短軸1.3，厚さ0.5～0.6，孔径0.3cm。完存品。	60年試掘。
810 〃	砥　　石	長さ12.3，幅2.3～4.0，厚さ1.1～2.2cm。両端部は切断面。長側面は，相接する２面が使用面，他の２面が準使用面。一部欠損。	60年試掘。
811 〃	〃	長さ8.3，幅2.4～3.6，厚さ1.7～2.0cm。両端部は切断面。長側面は，全面使用面。完存品。	表土。
812 〃	〃	現存長8.4，幅3.1～3.6，厚さ1.4～1.9cm。一方の端部は切断面，他方の端部は欠損面。長側面は，相対する小さい面が使用面，他の２面が整形面。	表土。
813 〃	〃	現存長6.4，現存幅1.8，現存厚1.5cm。一方の端部は切断面，他方の端部は欠損面。長側面は，小さい１面が欠損，他の３面が使用面。	ＳＫ24。
814 〃	〃	現存長14.1，現存幅6.0，現存厚5.7cm。両端部は欠損。長側面は，丸味を持っている側が自然面，他の２面が使用面と準使用面。	表土。
815 図面14	石　　鏃	平基無茎鏃。長さ2.7，幅1.6，厚さ0.2cm。安山岩。	60年試掘。
816 〃	〃	平基無茎鏃。長さ3.3，幅2.0，厚さ0.5cm。安山岩。	ピット。
817 〃	〃	凹基有茎鏃。長さ4.0，幅1.6，厚さ0.5cm。ハリ質安山岩。	ＳＤ11。
818 〃	〃	凹基有茎鏃。長さ5.9，幅1.6，厚さ0.5cm。ハリ質安山岩。	ＳＤ12。
819 〃	磨製石斧	太型蛤刃石斧。現存長3.5，幅5.0，厚さ2.4cm。	ＳＤ12。
820 〃	〃	環状石斧。外径6.0，内径1.1，幅4.9，厚さ2.3cm。	ＳＫ38。
821 〃	ピエスエスキーユ	長さ5.7，幅2.3～4.4，厚さ0.3～1.7cm。流文岩質。	ＳＤ11。
822 第12図	骨　　鏃	骨角器の鏃。凸基有茎鏃。現存長2.2，幅1.2，厚さ0.4cm。	ＳＸ01。

V 結　語

1．遺　構

検出された遺構は，土坑28基，溝12条，凹地２基である。遺構の時期は，以下の通りである。

弥生時代；ＳＫ32～36・38・39・42～49，ＳＤ15～19

古墳時代前期；ＳＤ11・13・14

中世；ＳＫ22・24～26，ＳＤ08～10・12

弥生時代

楕円形や不整楕円形の土坑の多くは，弥生時代中期に所属するものと判断される。出土遺物の中では，弥生時代中期の土器の出土量が最も多く，明らかに新しい時期の遺構の埋土・覆土の中からも出土するので，弥生土器の出土をもって単純に時期を決定する理由には行かないが，上記の土坑は弥生時代中期のものとしてよいと思われる。溝については若干不安な点もあるが，一応弥生時代中期のものとしておく。

古墳時代前期

大型の溝３条が該当する。ＳＤ11は途中で切れるが，方形に廻る溝になると判断したものである。その性格として，方形周溝墓や方墳になる可能性を指摘したものである。調査中は，当溝を弥生時代中期のものと考えていた。すなわち，①埋土・覆土の中から弥生土器が多く出土する，②方形に廻る大溝であることで，弥生時代中期のものと考えていたＳＤ01（昭和61年度の調査で検出）に類似している，ことからである。その後，遺物整理・報告書作成作業を行っている中で，古墳時代前期の溝と考えを改めるに至った。これについては，①古式土師器が数点出土している，②弥生土器は付近の土坑のものと考えられる，③ＳＤ01についても，同様に考え，弥生土器はＳＤ01に切られているものを含め，他の弥生時代に所属するものから流れ込んだものと考えられる，と思うに至ったからである。一方，ＳＤ13・14としたものについては，ＳＤ11と類似しているので，方形に廻る溝の一部である可能性がある。古式土師器のグループとして，高杯の201～204の４点を図示しておいた。これは昭和60年度の試掘調査の時出土したものである。もちろん遺構との関連は不明だが，完形に近いものないし半完形品であることや高杯と言う形態より，ＳＤ01やＳＤ11のような方形周溝墓や方墳に本来所属していたものであった可能性がでてきた。

中世

土坑と溝であり，その性格が明確なものは検出されていない。これらの中でＳＤ12は，調査地区を斜めに横断する長大な溝である。ほぼ東西に走る点や昭和61年度の調査において，中世の井戸址が検出されている点を考えると，中世村落内の何らかの施設を区画するような性格も想定されよう。

2．遺　　物

出土遺物を時代的に区分すれば，弥生時代，古墳時代前期，平安時代，中世となる。弥生時代は，弥生時代中期の土器で石器や土製紡錘車も該期のものと判断される。古墳時代前期はいわゆる古式土師器である。平安時代は須恵器と古式土師器及び中世土師器のⅢ以外の土師器で，平安時代でも前半期を中心とするものと判断される。中世は各種陶磁器と一部の土師器から成り立っている。ここでは出土量が多い，１－弥生土器，２－石器，３－中世土器・陶磁器について，若干のまとめをすることにする。

弥生土器

県下における弥生時代中期の櫛描文土器群はⅠ～Ⅲ期（石塚Ⅰ～Ⅲ期）に区分されるのが基本となっている。これは，上野章氏によって，当石塚遺跡出土土器を中心としてなされたものである（上野1972･1985）。昭和61年度の本調査及び今回の調査で出土した弥生土器は，ほとんどのものがこの段階の土器群である。これより遡る，前期的様相をもつものは極く僅かしか出土していない。石川県下においては，櫛描文土器群は「小松式」とされているものであり，その後，凹線文土器波及期の土器「戸水Ｂ式」を介して，凹線文土器群の後期弥生土器が展開してくるとされている。前回及び今回の調査では，凹線文土器群は確認されていない。このことは，凹線文土器群の富山県下への波及の問題もあるが，前回及び今回出土の弥生土器が，石塚Ⅲ期の段階までの土器群で構成されているとみてよいと考えたい。

東日本系の弥生土器としたものは，長野県下で「栗林式」とされているもの（笹沢1977ほか）との類似性が指摘できる。新潟県の柏崎市下谷地遺跡では「下谷地Ⅰ・Ⅱ式」とされる櫛描文土器と「栗林Ⅰ・Ⅱ式」土器が共伴しており，小松式＝石塚Ⅱ・Ⅲ期＝下谷地Ⅰ・Ⅱ期＝栗林Ⅰ・Ⅱ式を同時期と捉えられている（高橋1979）。このことより，栗林式土器の出土は矛盾しない共伴例と言えよう。なお，ここで東日本系とした土器は，縄文や連弧文といった特徴的な施文が見られるもののみであり，中部高地型櫛描文土器の存在も含めて総括的な検討を行ってはいない。上野章氏によれば，石塚遺跡では天王山系統の土器は存在していない（上野1985）とされている。そして，前回や今回の調査でも出土していない。このことは，天王山式土器が石塚Ⅲ期より新しいものであることが，此度の資料からも言えることを示している。

石器

磨製石斧＝太型蛤刃石斧・環状石斧，石鏃，ピエスエスキーユの石器については，一応弥生時代中期のものとしておく。弥生時代の遺構以外から出土しているものが多く，判断に迷う面もあるが，新しい時期の遺構から出土している場合でも，同時に弥生時代中期の土器が出土しており，このように考えるのが，蓋然性が高いと思うからである。局部磨製石鏃とピエスエスキーユについて，西井龍儀氏に，説明と考察をしていただいたので，以下に記しておく。

局部磨製石鏃　有茎石鏃２点の内，817（図面14）の着柄部に当たる基部両面に磨痕がある。

横方向の荒い磨きで擦痕状である。鏃形はほぼ左右対称で，逆三角形状の茎（中子）が付く。先端やかえりの端部は鋭く，一見，有舌尖頭器に似る，石材はハリ質安山岩で，他に長身でかえりが外へはね出るもう１点の有茎石鏃818（図面14）も同石質である。ハリ質安山岩は別名「下呂石」とも称され，飛騨方面からの石材供給，あるいは製品の流入経路が考えられる。局部磨製石鏃は飛騨・信濃地域において，縄文時代早期の押型文土器に無茎のものが伴出する（斉藤1987ほか）ことが知られているが，有茎の局部磨製石鏃は管見にない。着柄部を局部磨製とする製作意図は同じであっても，本遺跡の局部磨製石鏃をただちに縄文時代早期に比定することは不適当であり，むしろ，かえりの形状や，長身鏃の類例が新潟県下の弥生時代遺跡にある（甘粕他1983）ことからすれば，本資料は弥生時代のものとみてよさそうである。

ピエスエスキーユ　２点あり，821（図面14）は流文岩質の光沢ある石材を用いている。上･下端には両面に及ぶ階段状剥離があり，そのエッジは下端の一部が潰れ状となる以外は，比較的鋭利である。四辺形となる正面左側縁に上・下各方向から一面ずつの截断面をもつ。ピエスエスキーユとしては大型である。他の１点（図示してない，昭和61年度の調査地区ＳＤ01から出土）は安山岩質で，やや小ぶりながら四周に両面の小剥離がある。ピエスエスキーユは旧石器時代以来の石器で，弥生時代における県下の出土例は，上市町正印新遺跡（酒井1982）等で，類例が少ない。新潟県の下谷地遺跡（戸根他1979）から多く出土しており，本遺跡の資料は弥生時代にまで存続した石器として類例を加えることになる。

中世土器・陶磁器

在地産土師器，珠洲，越前，瀬戸系灰釉陶器・天目，中国産青磁である。瀬戸系陶器と中国産青磁については，宇野隆夫氏より15世紀前半を中心とするものとの御教示をいただいている。また，平安時代後期～鎌倉時代初頭の明確に言えるものがない点を考慮すれば，鎌倉～室町時代，すなわち13世紀から15世紀前半代の時期を与えることができよう。生産・流通の面からは，当地において，①在地産土師器に比較的近隣より流入した珠洲と言う組み合わせから，②これに加えてより遠隔地の越前・瀬戸系陶器さらに輸入品からなる組み合わせへの変化が窺われる。①は13・14世紀代の様相であり，②は15世紀前半代の様相となる。

訂　正

『石塚遺跡調査概報Ⅰ』において，若干の誤りがありましたので，ここで訂正しておきます。断面図の標高（レベル）の数値が，正しい数値より，1.5m高く表示してしまいましたので，訂正します。例えば，第６図において，「12.30m」としてあるものは「10.80m」が正しい数値です。

参考文献

甘粕健他　1983 『新潟県史 ― 資料編 1 原始 ・ 古代 1 考古編』 新潟県教育委員会

上坂成次・上野章　1968 「高岡市石塚遺跡発掘調査概報」『オジャラ』 3　富山県立高岡工芸高等学校地理歴史クラブO・B会

上野章　1972 「弥生時代付古式土師器」『富山県史考古編』 富山県

上野章　1985 「弥生土器について」『富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群―第7次緊急発掘調査概要』　富山県教育委員会

上野章　1986 「高岡市石塚遺跡出土の壺」『埋文とやま―富山県埋蔵文化財センター所報』第16号　富山県埋蔵文化財センター

大野文郷　1986 「石塚遺跡 ― 富山県高岡市石塚所在の弥生遺跡調査概報 ― 」　高岡市教育委員会

岡村道雄　1976 「ピエス・エスキーユについて」『東北考古学の諸問題』東北考古学会編　東出版寧楽社

斉藤幸恵　1987 「押型文系土器文化の石器群とその性格」『郷土の文化財16―樋沢押型文遺跡調査研究報告書』　岡谷市教育委員会

酒井重洋　1982 「正印新遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告―上市町土器・石器編』　上市町教育委員会

笹沢浩　1971 「善光寺平における弥生時代中期後半の土器」『信濃』第23巻第12号　信濃史学会

笹沢浩　1977 「弥生土器―中部高地」『考古学ジャーナル』No.131・133・134　ニューサイエンス社

笹沢浩　1978 「中部高地型櫛描文の系譜」『中部高地の考古学』　長野県考古学会

高橋保　1979 「出土土器について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第19―北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書―下谷地遺跡』　新潟県教育委員会

戸根与八郎他　1979 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第19―北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書―下谷地遺跡』　新潟県教育委員会

橋本澄夫　1968 「石川県小松市八日市地方遺跡の調査―県下の櫛目文系土器」『石川考古学研究会々誌』第11号　石川考古学研究会

橋本澄夫　1975 「弥生土器―中部北陸」『考古学ジャーナル』No.106・107・109・111 ニューサイエンス社

逸見護　1982 『昭和56年度高岡市埋蔵文化財調査報告書―石塚遺跡，荒見崎遺跡，利賀野遺跡』 高岡市教育委員会

逸見護　1983 『昭和57年度高岡市埋蔵文化財調査概報』 高岡市教育委員会

森秀典他　1987 『立山町文化財調査報告書第3冊―辻遺跡・浦田遺跡発掘調査概報』立山町教育委員会

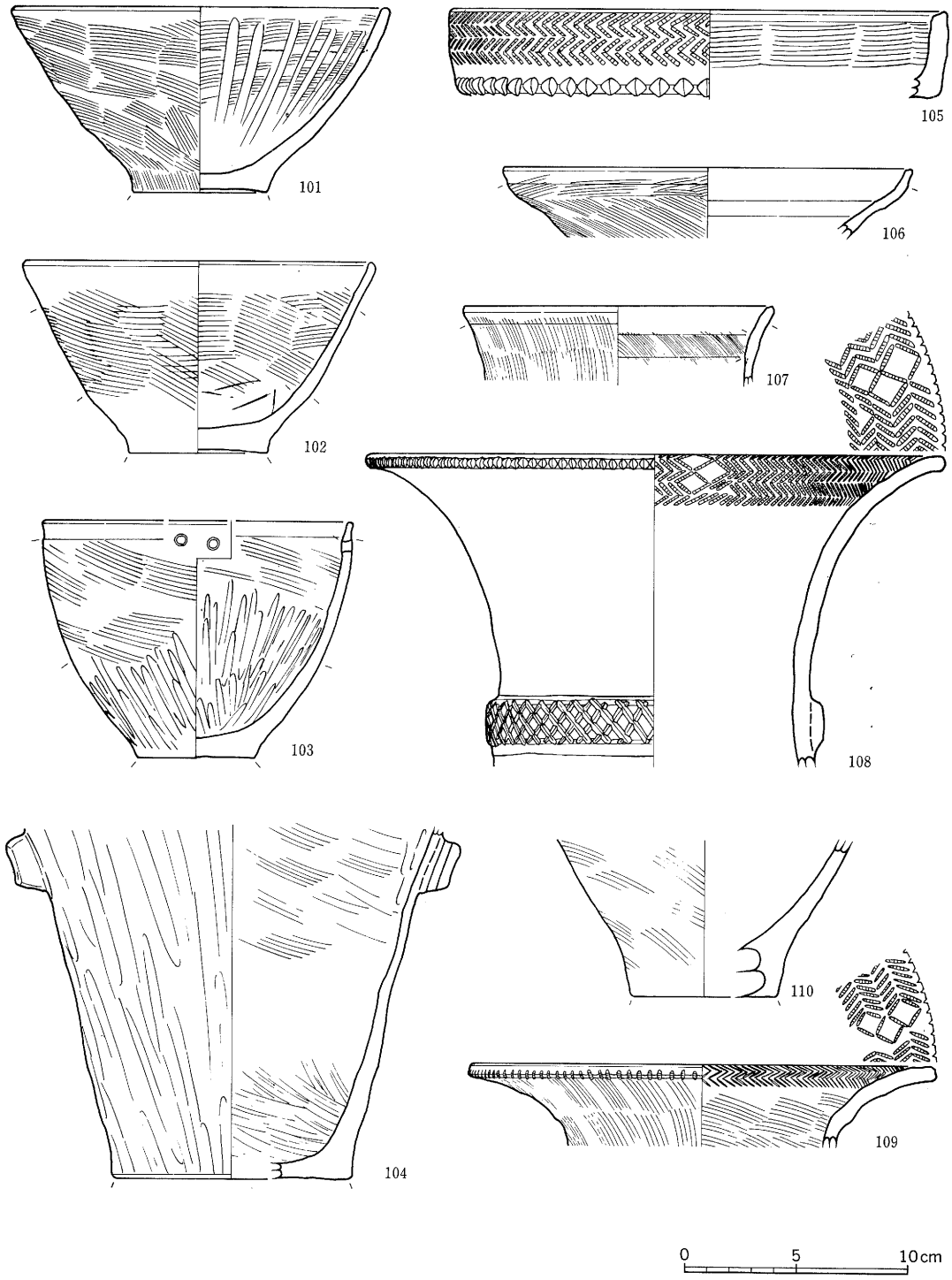
山口辰一　1987 『高岡市埋蔵文化財調査概報第3冊―石塚遺跡調査概報Ⅰ』 高岡市教育委員会

吉岡康暢　1977 「加賀・珠洲」『世界陶磁全集3―日本中世』 小学館

吉岡康暢　1981 「珠洲」『日本やきもの集成4―北陸』 平凡社

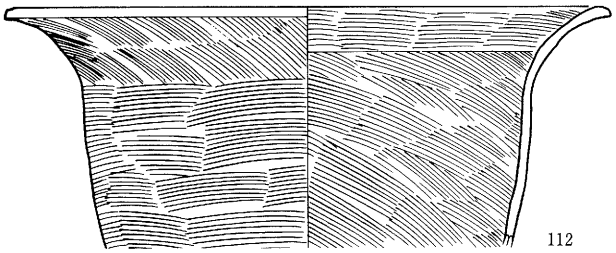
図　面・図　版

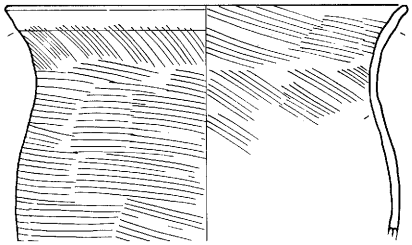
図面一　遺物実測図（弥生土器）

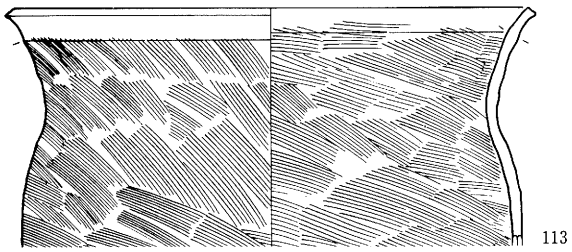


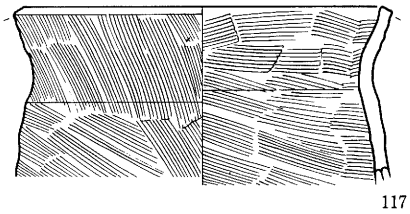
縮尺 1/3

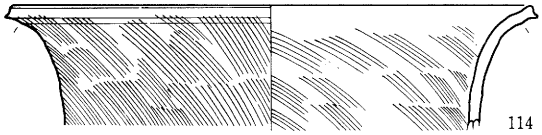
図面二　遺物実測図（弥生土器）

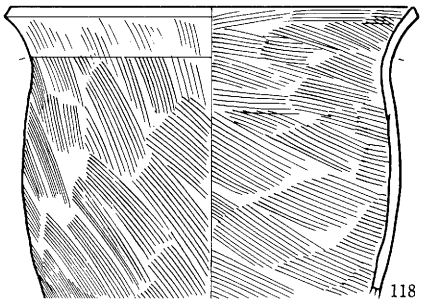


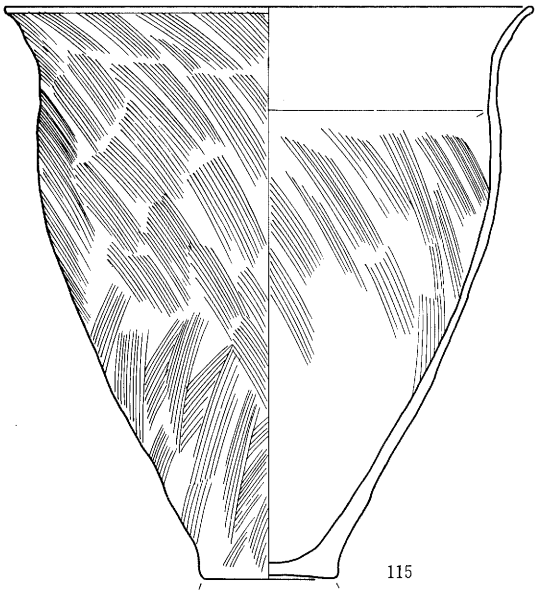


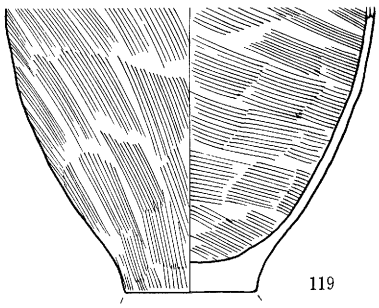


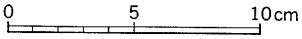






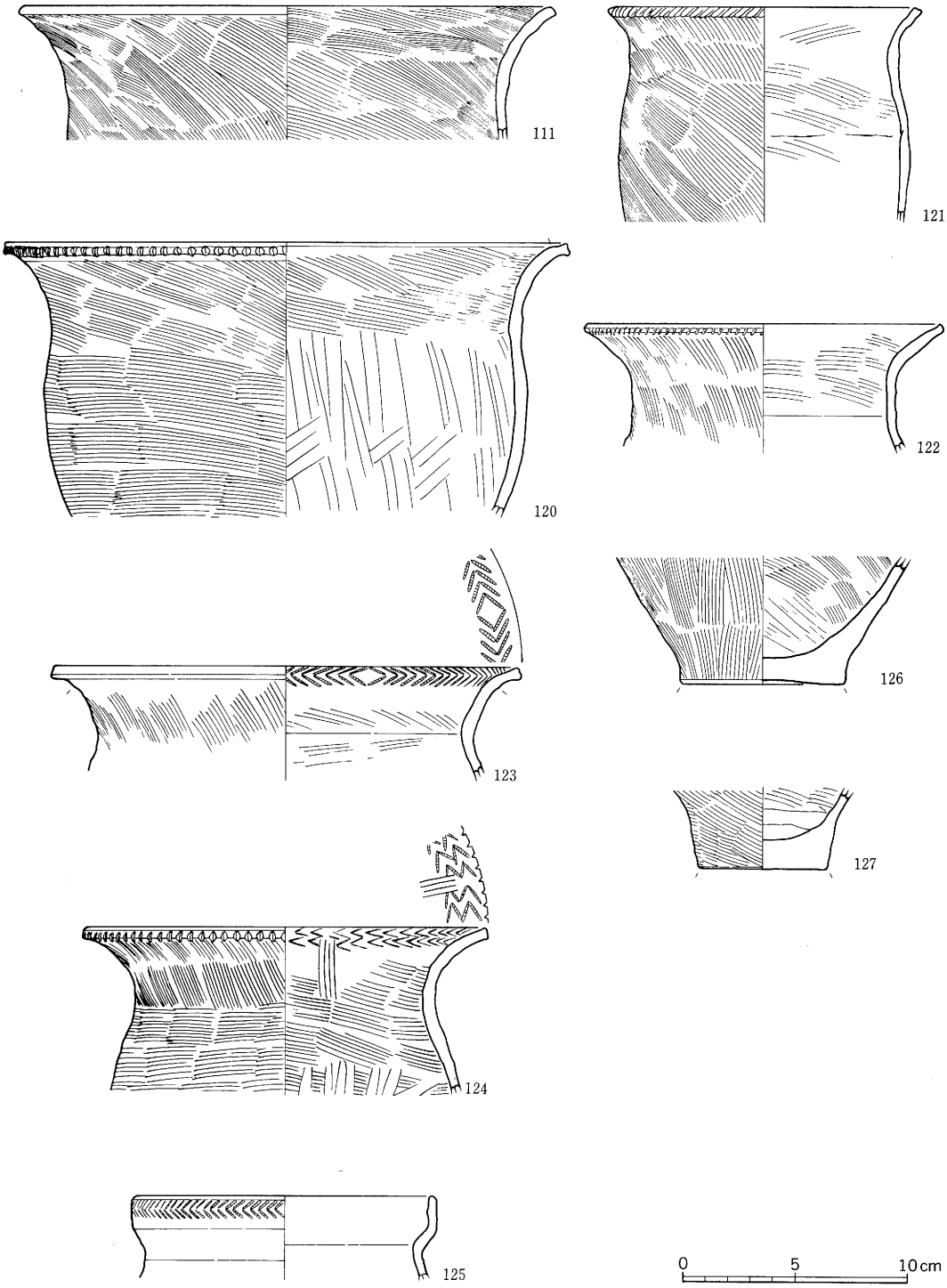






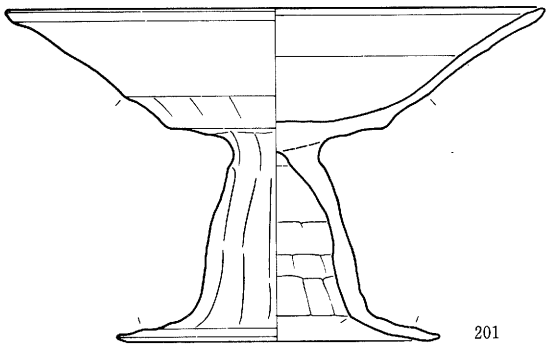
縮尺 1/3

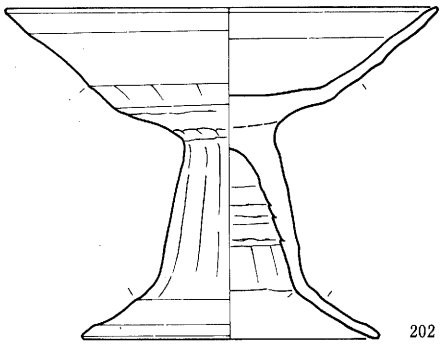
図面三　遺物実測図（弥生土器）

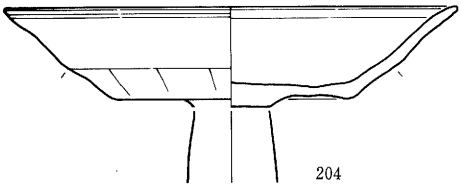


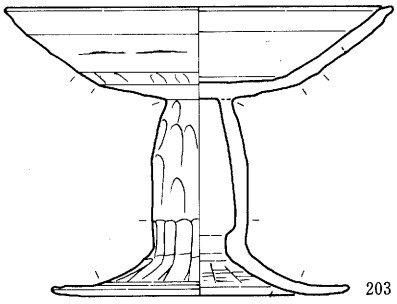
縮尺 1/3

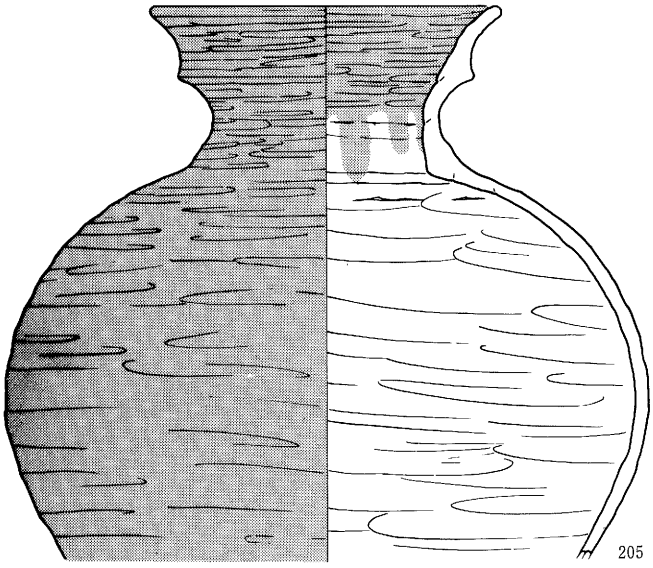
図面四　遺物実測図（土師器）

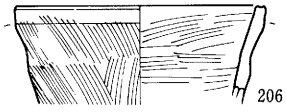


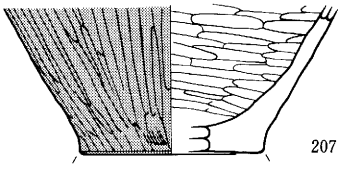


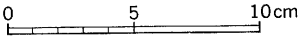






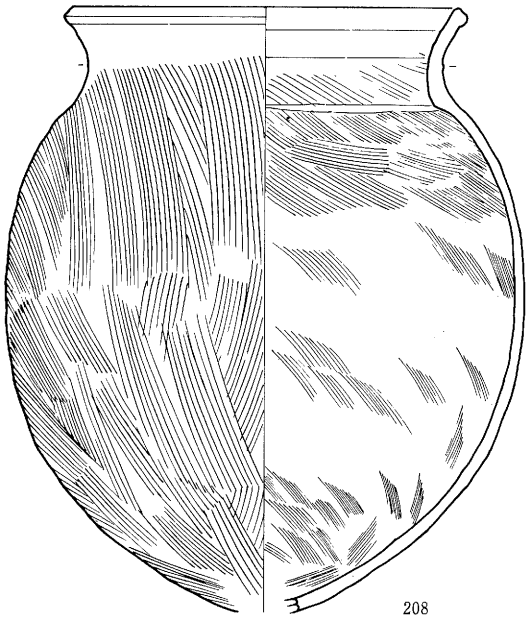


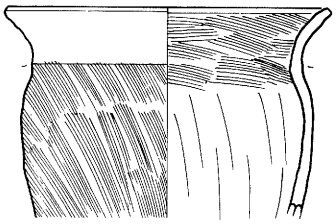


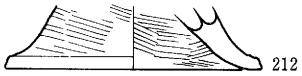


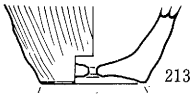
縮尺 1/3

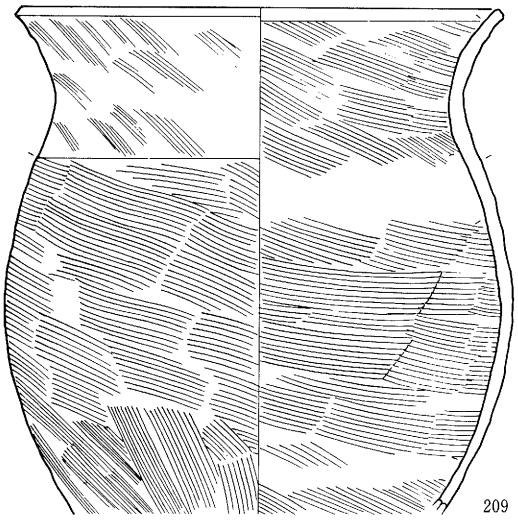
図面五　遺物実測図（土師器）

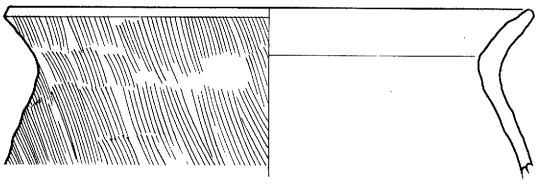


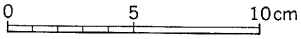






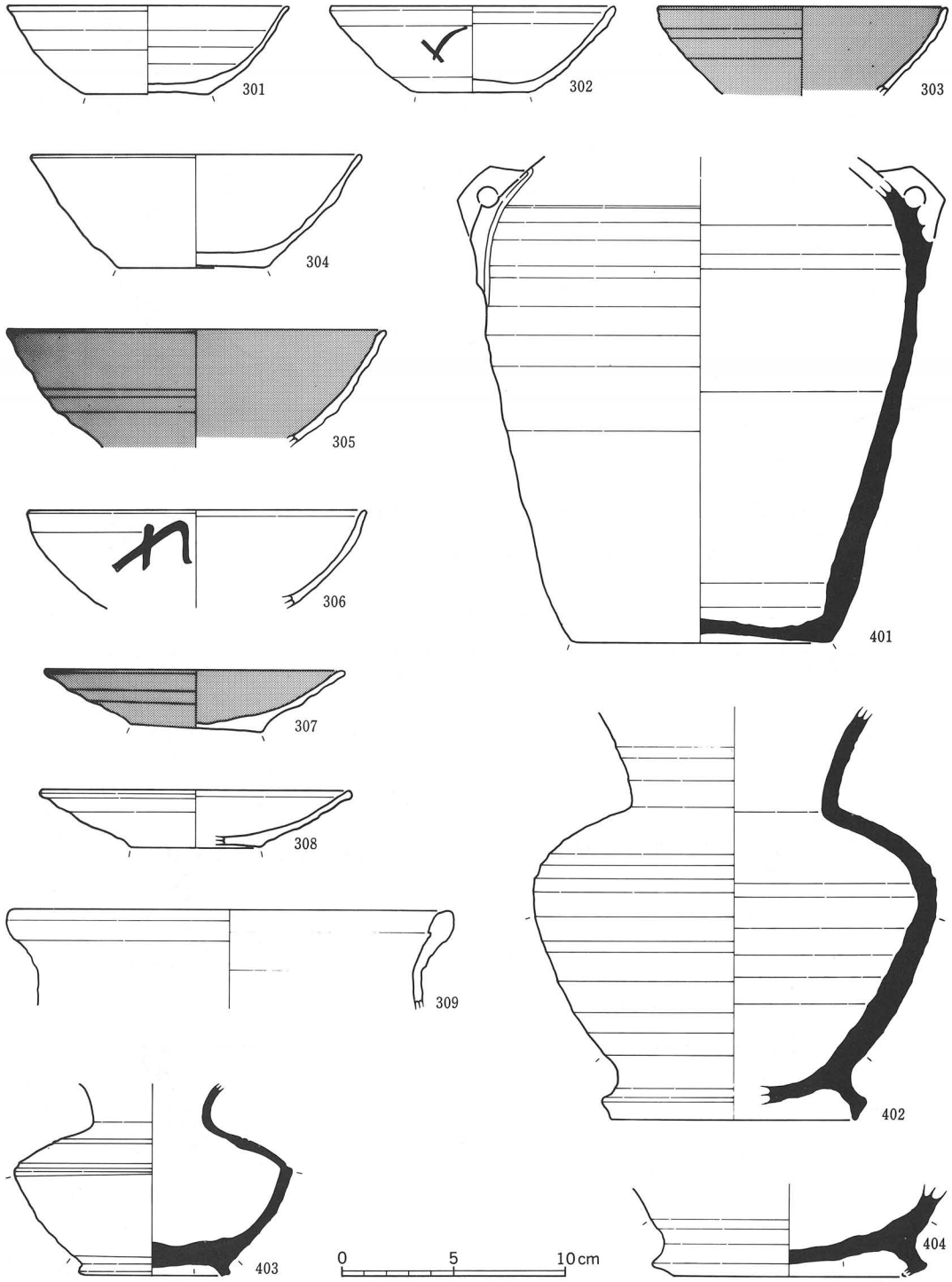






縮尺 1/3

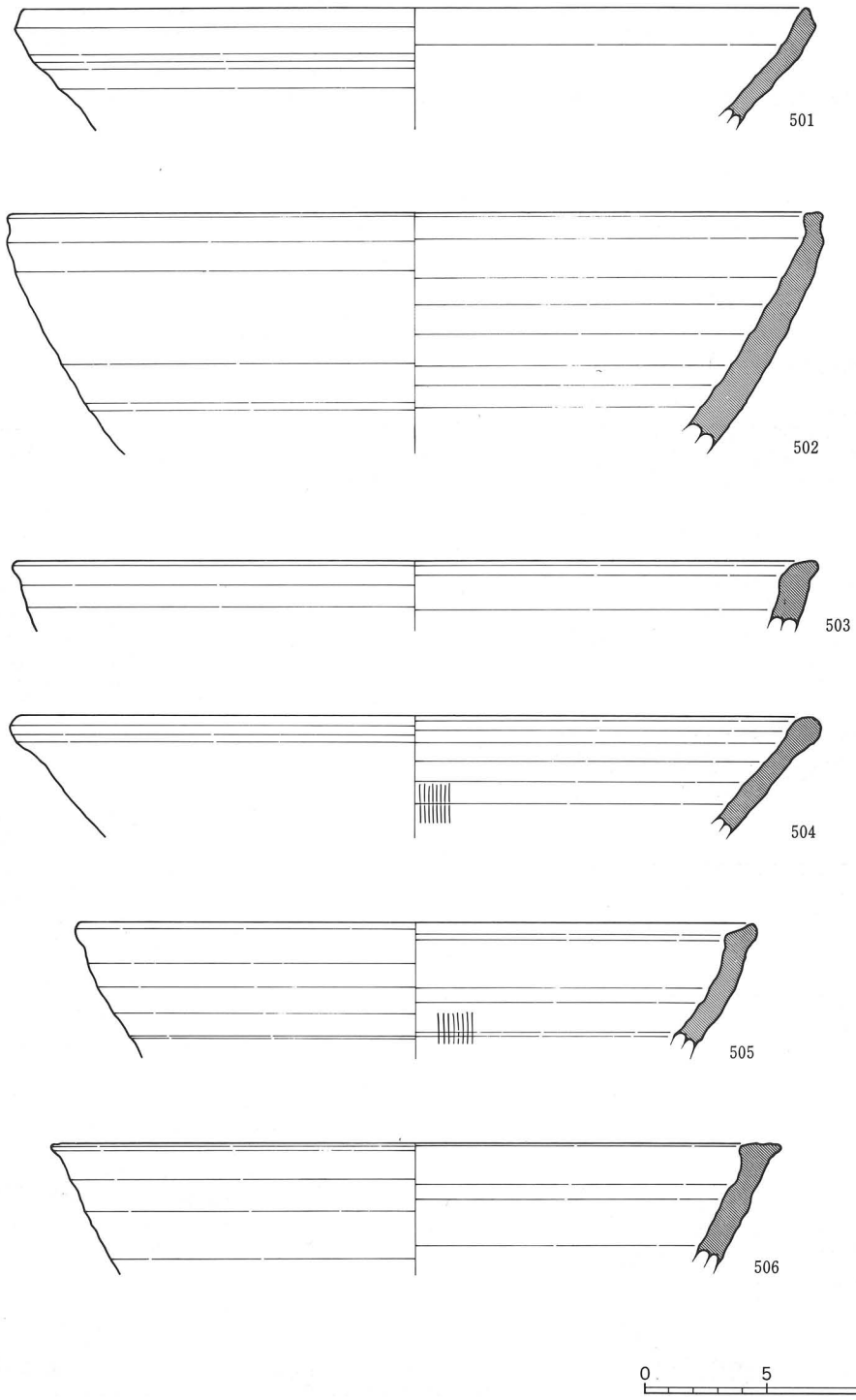
図面六　遺物実測図（土師器・須恵器）



土師器；301～309，須恵器；401～404

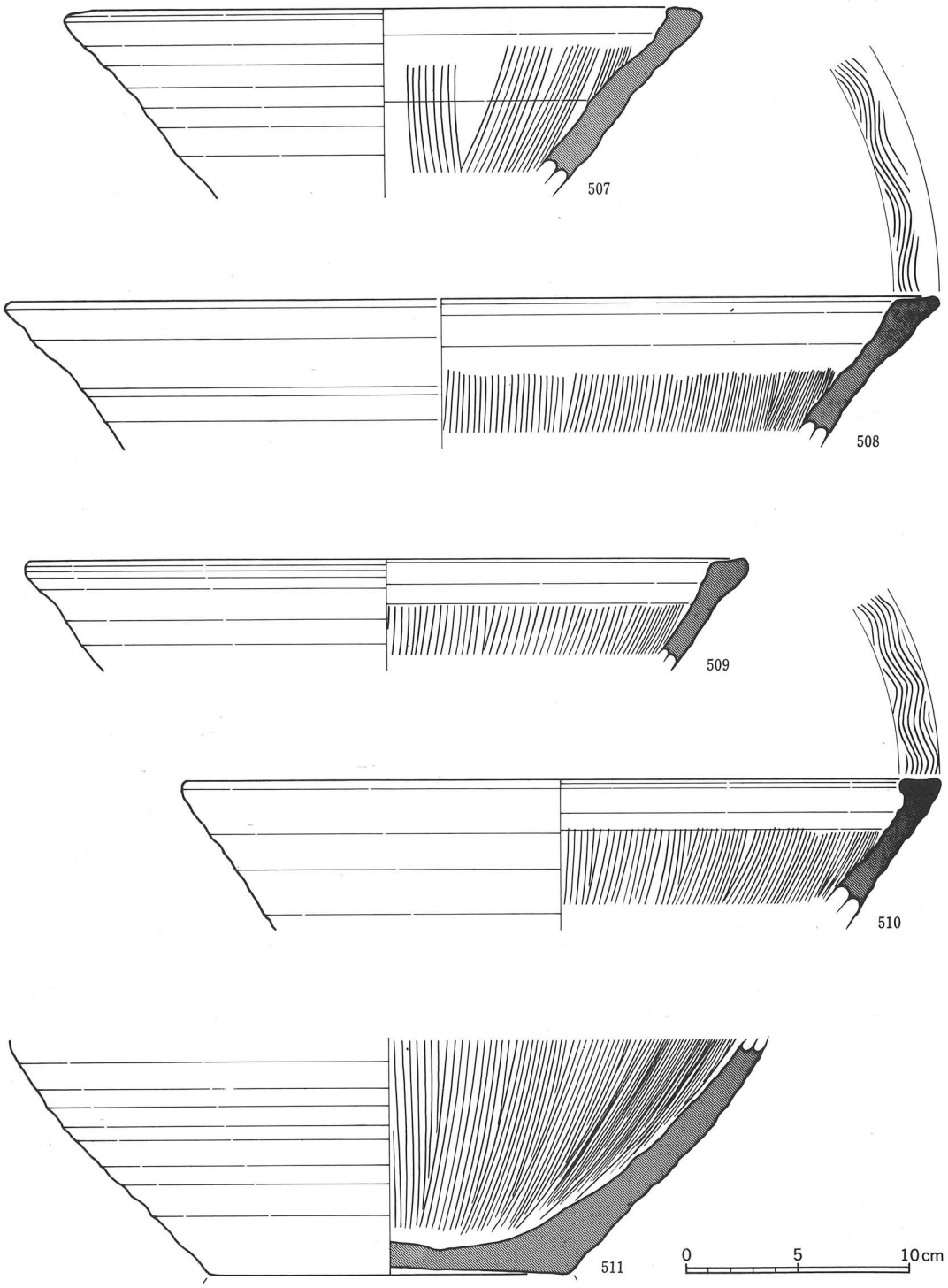
縮尺 1/3

図面七　遺物実測図（珠洲）



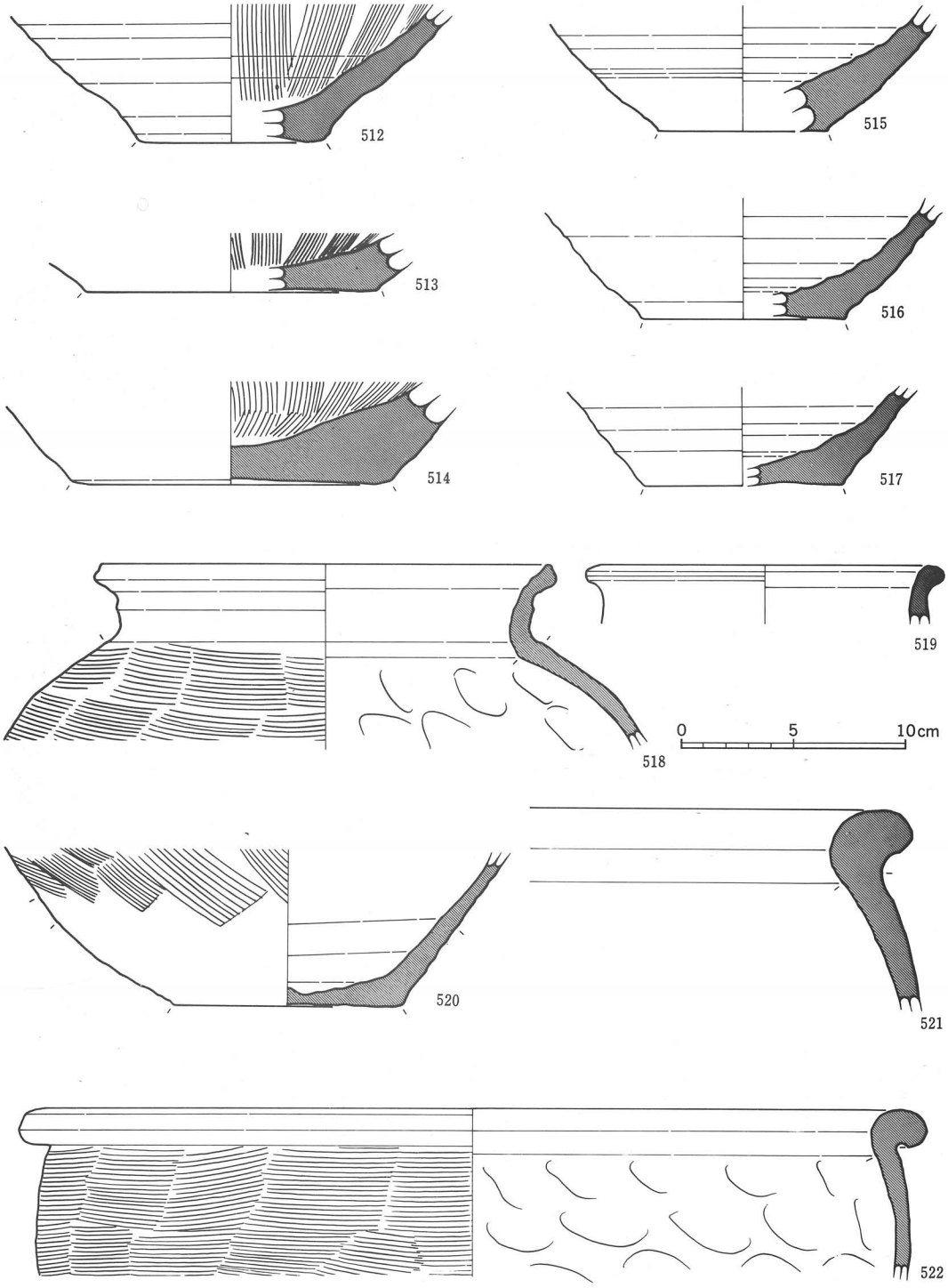
縮尺 1/3

図面八　遺物実測図（珠洲）



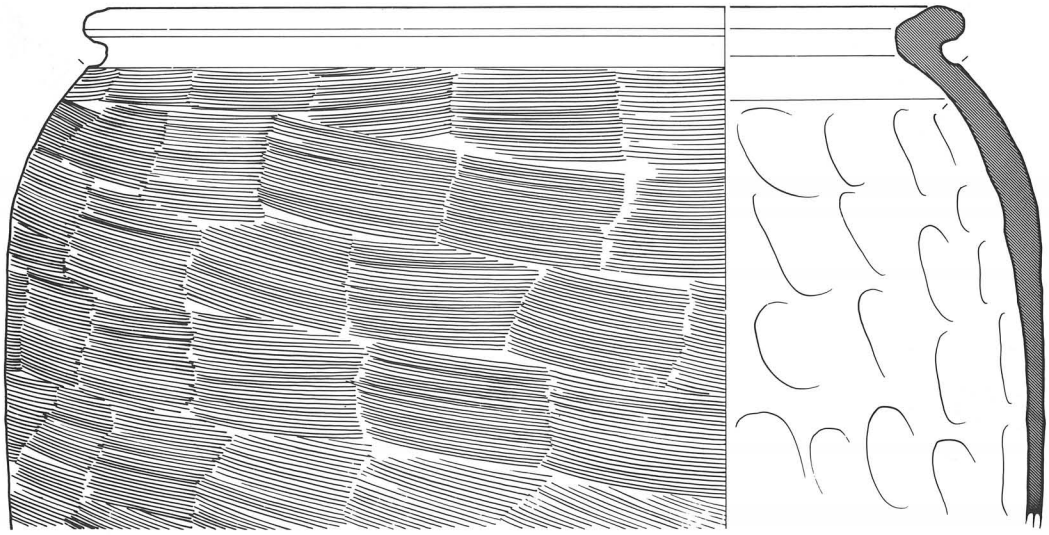
縮尺 1/3

図面九　遺物実測図（珠洲）

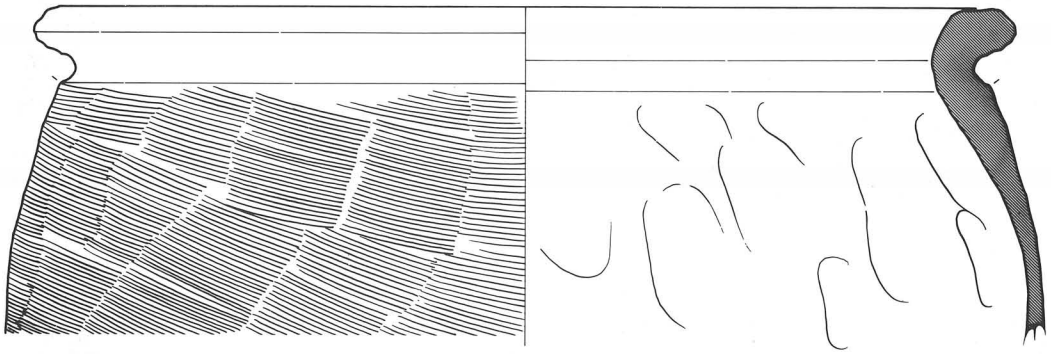


縮尺 1/3

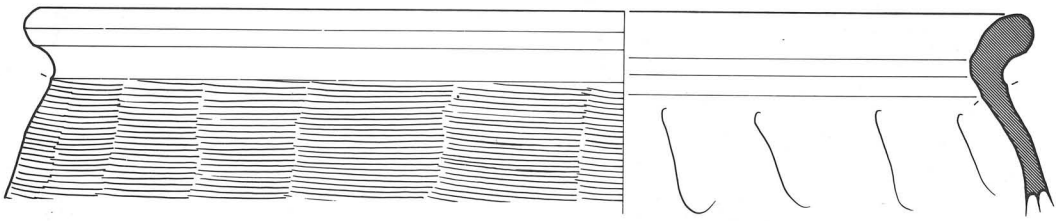
図面一〇　遺物実測図（珠洲）



523



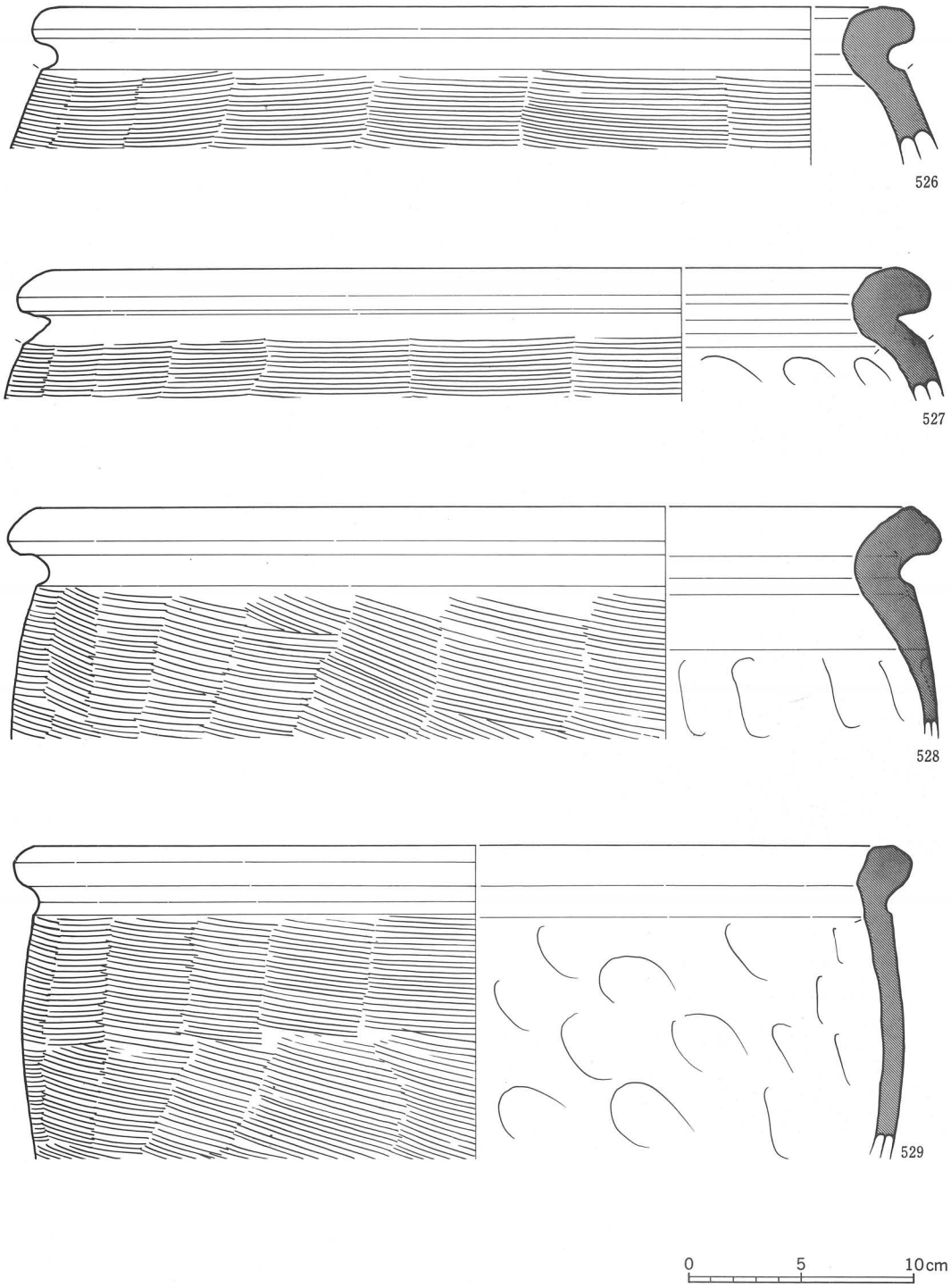
524



525

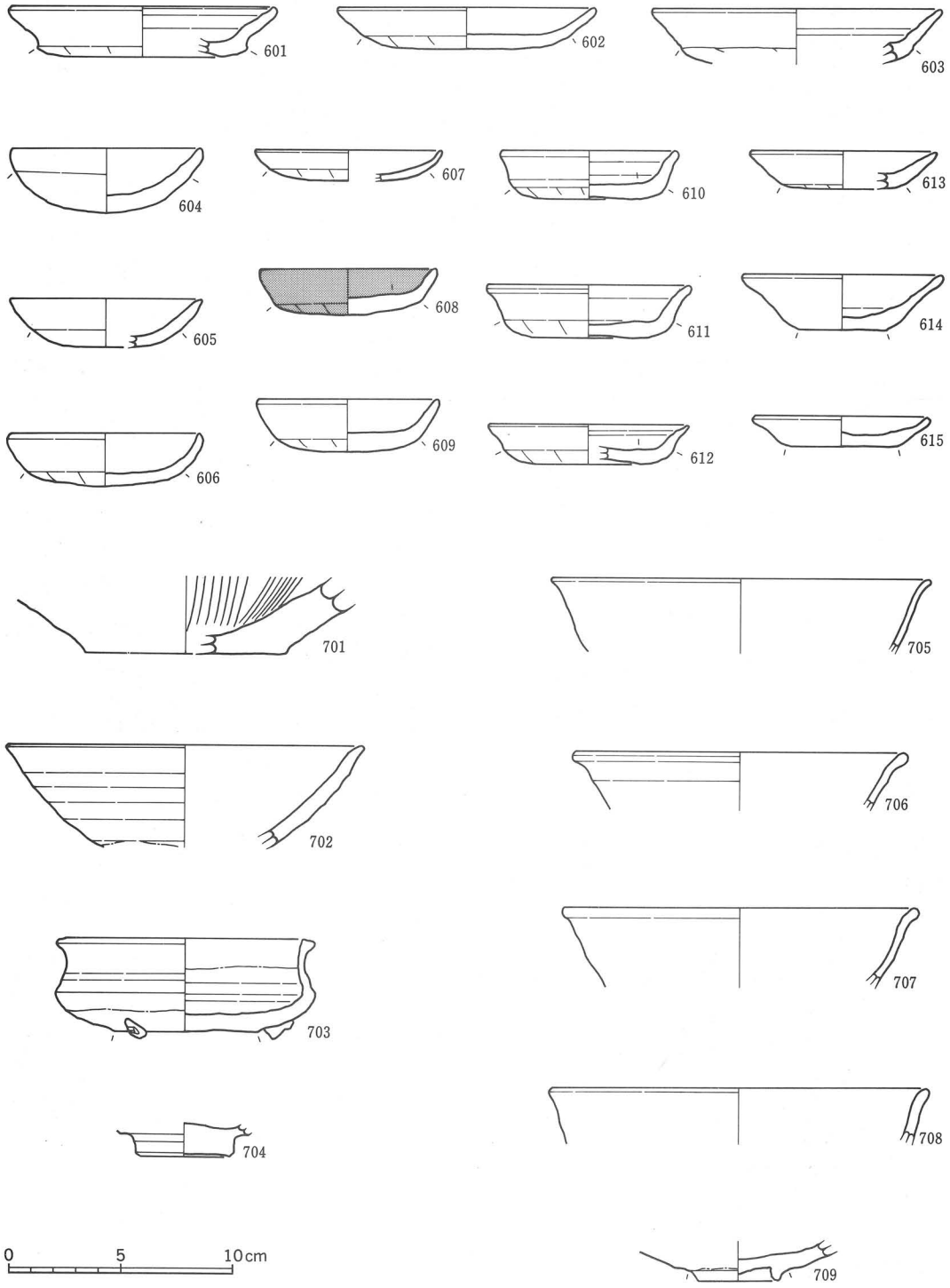
0　5　10cm

縮尺 1/3



縮尺 1/3

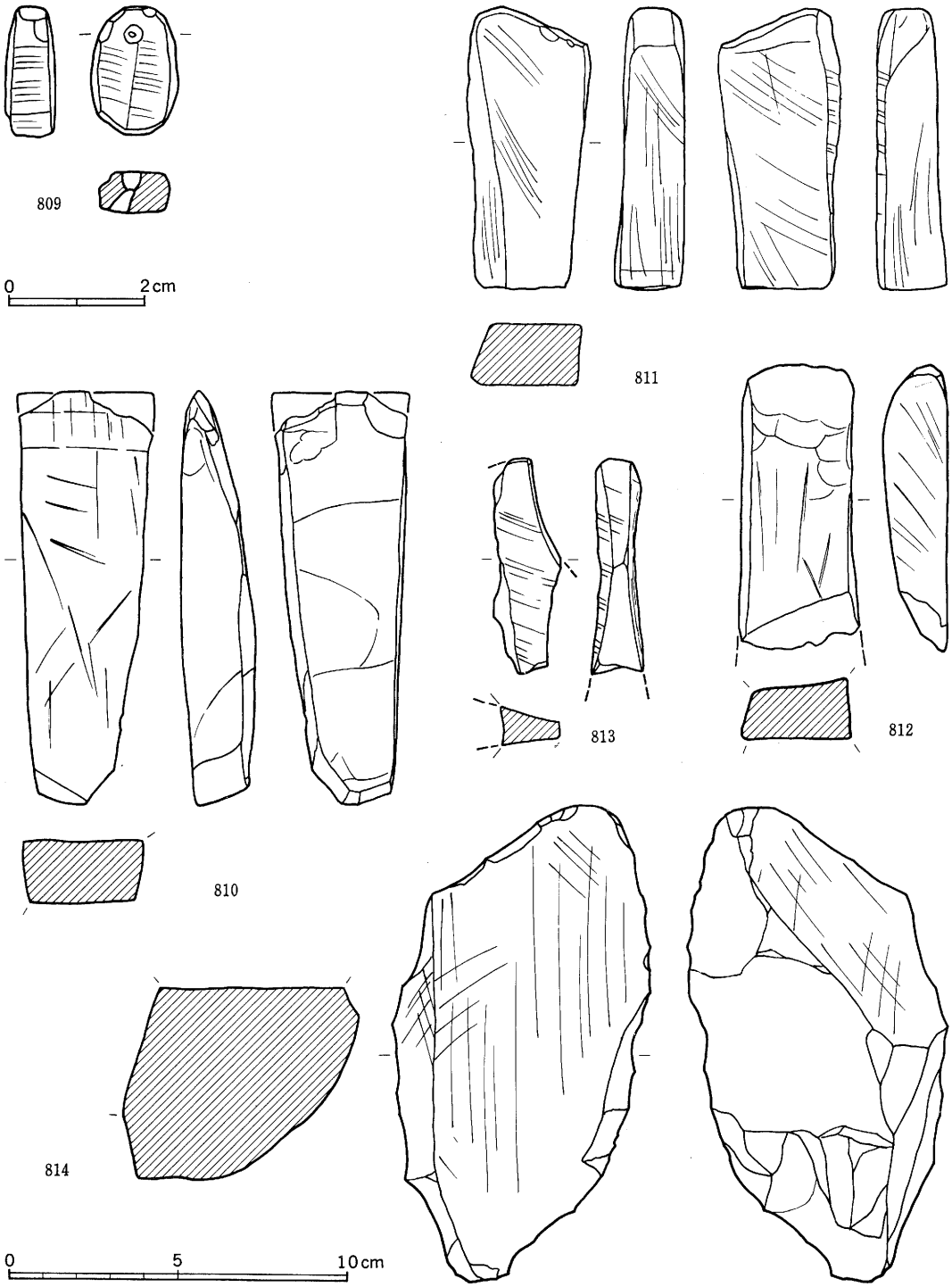
図面一二　遺物実測図（土師器・陶磁器）



土師器；601～615，越前；701，瀬戸系灰釉；702・703，瀬戸系天目；704，
中国産青磁；705～708，国産青磁；709

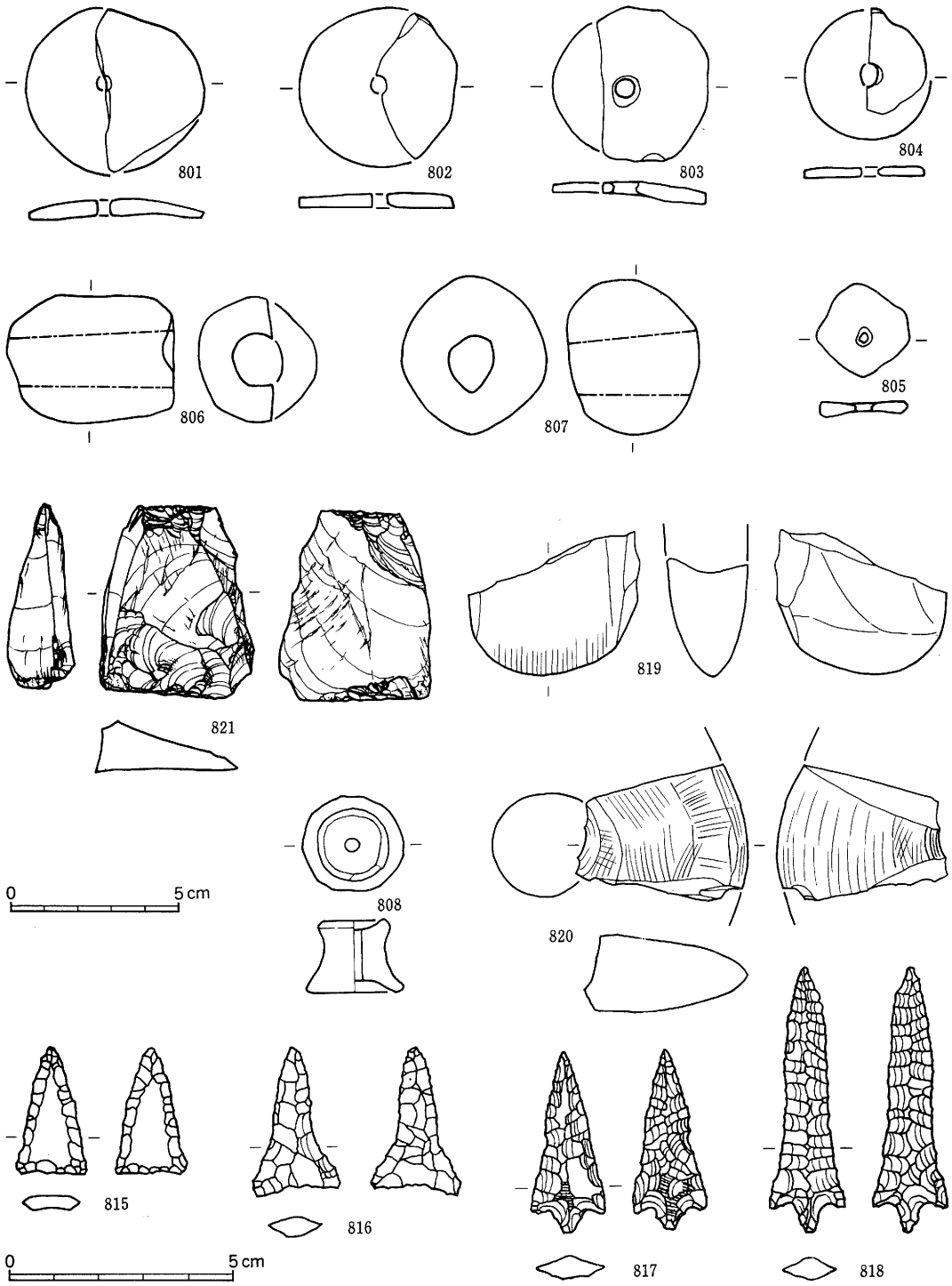
縮尺 1/3

図面一三　遺物実測図（石製品）



勾玉；809，砥石；810～814　　実大，縮尺½

図面一四　遺物実測図（土製品・石器）



土製紡錘車；801～805，土錘；806・807，磨製石斧；819・820，ピエス・エスキーユ；821　　縮尺 1/2

耳栓；808，石鏃；815～818　　縮尺 2/3

1．調査地区近景（西）

2．調査地区近景（東）

1．ＳＤ11西半部全景（南東）

2．ＳＤ11全景（西）

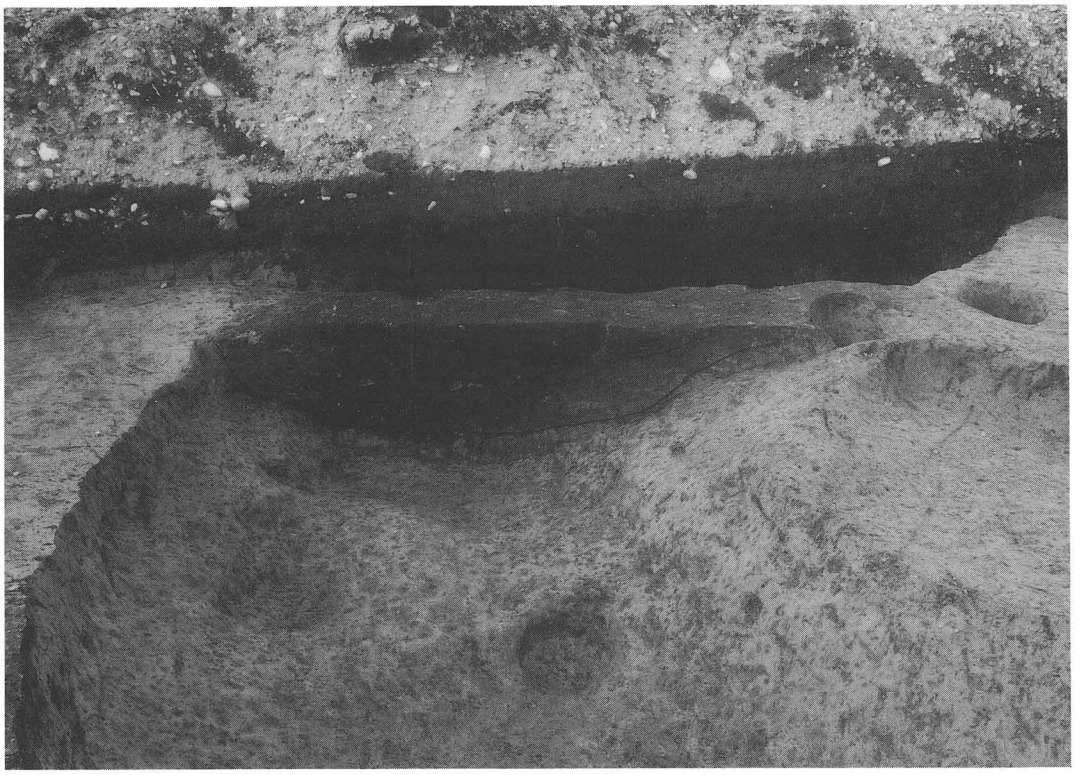
1．ＳＤ11西部近景（南西）

2．ＳＤ11西部近景（北西）

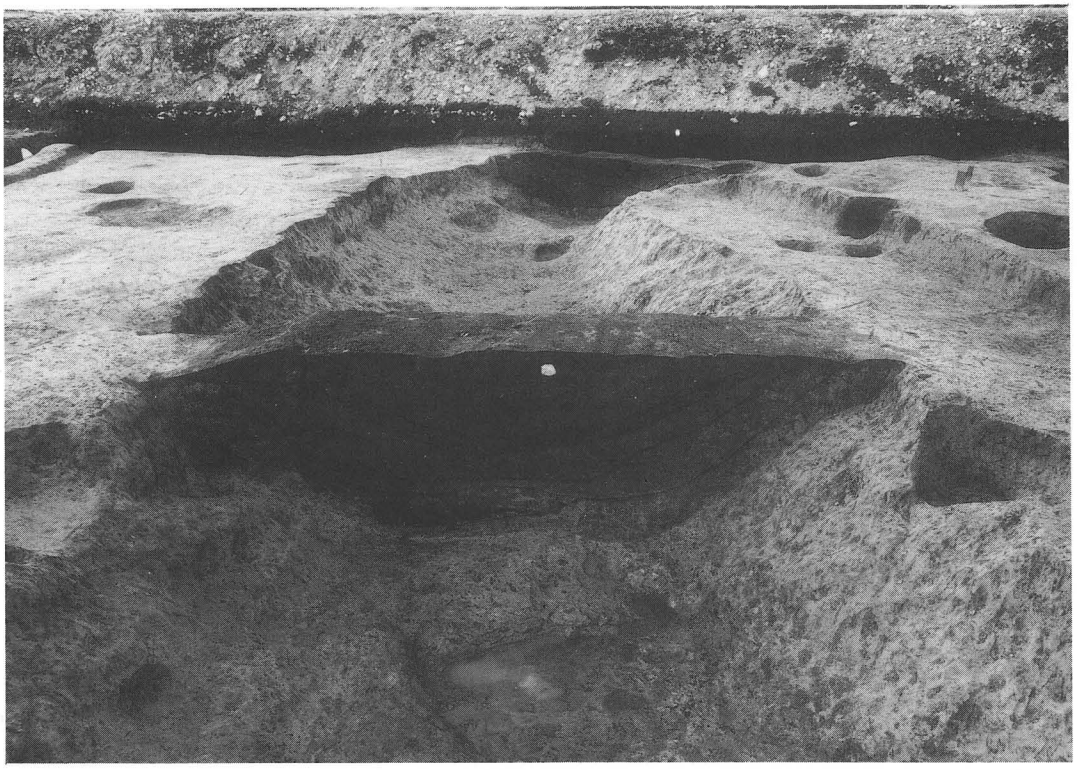
図版四　遺　構

1．ＳＤ11北西隅部近景（北東）

2．ＳＤ11南部近景（東）



1．ＳＤ11土層断面〔Ａ〕（南）



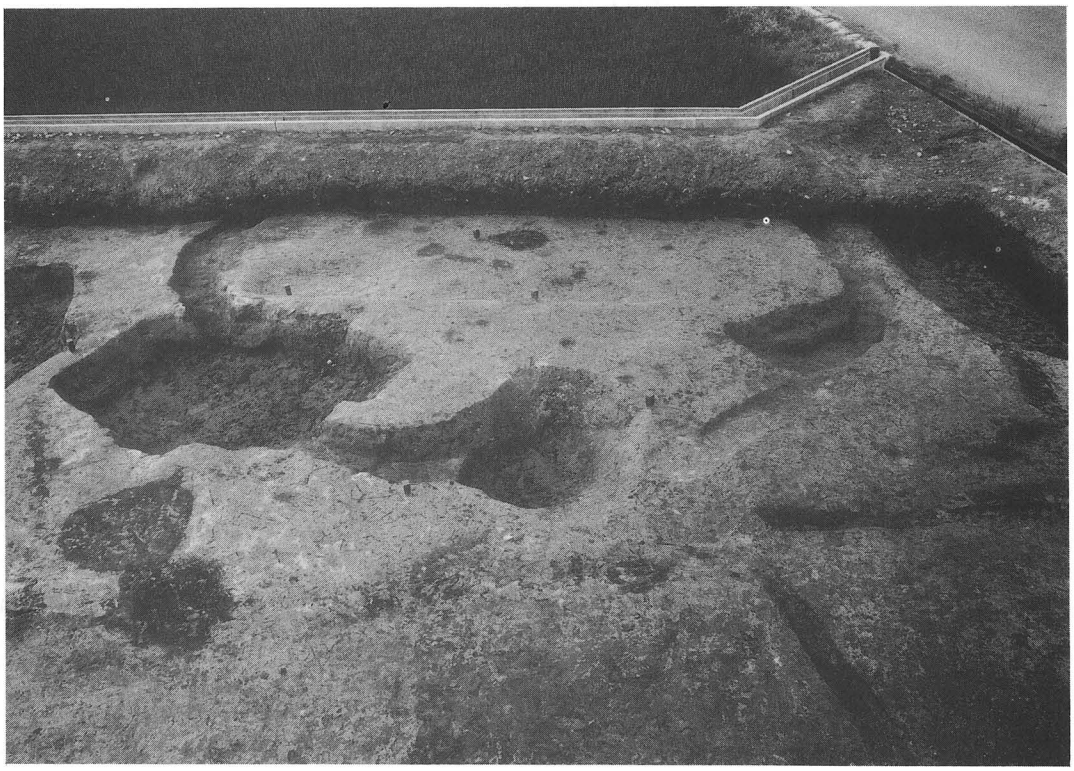
2．ＳＤ11土層断面〔Ｂ〕（南）

図版六　遺　構

1．ＳＤ11土層断面〔Ｃ〕（南）

2．ＳＤ11土層断面〔Ｄ〕（北）

1．ＳＤ12全景（東）

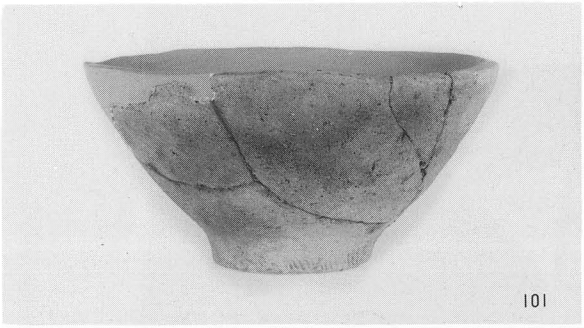


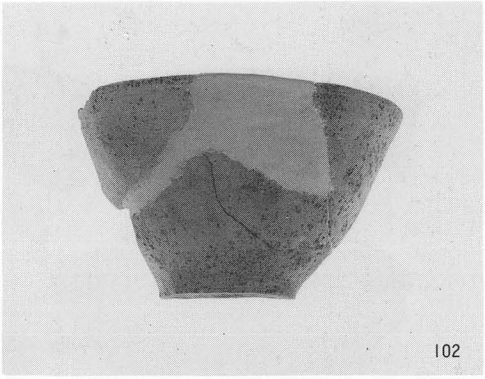
2．ＳＤ15全景（南）

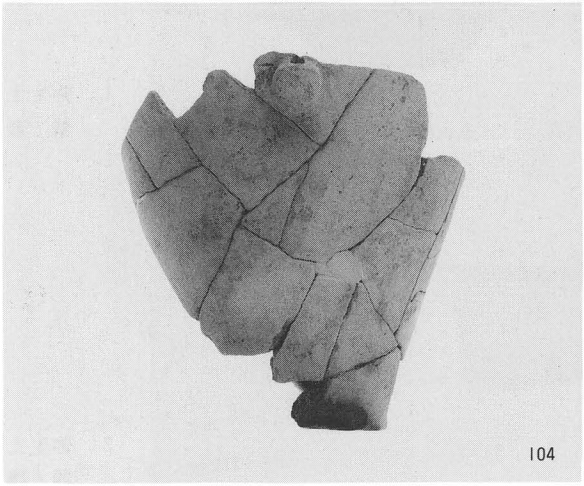
図版八　遺　構

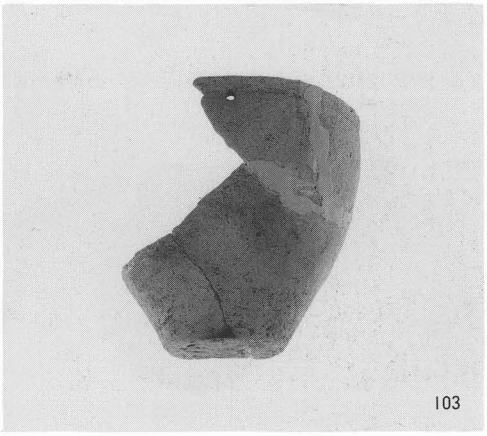
1．試掘調査地区東側全景（西）

2．試掘調査地区西側全景（東）

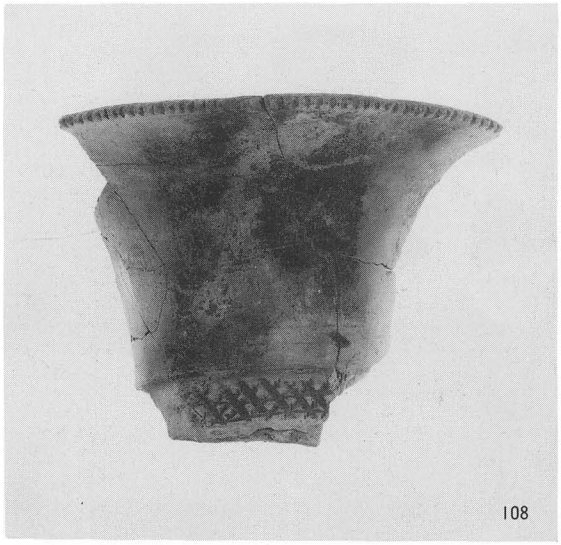




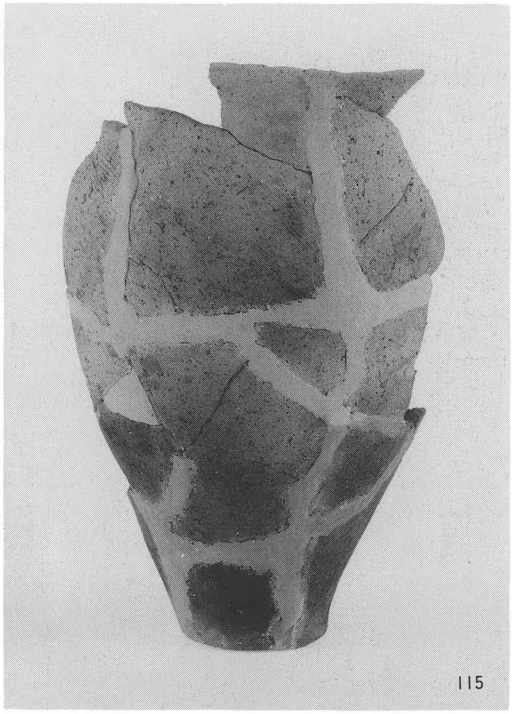




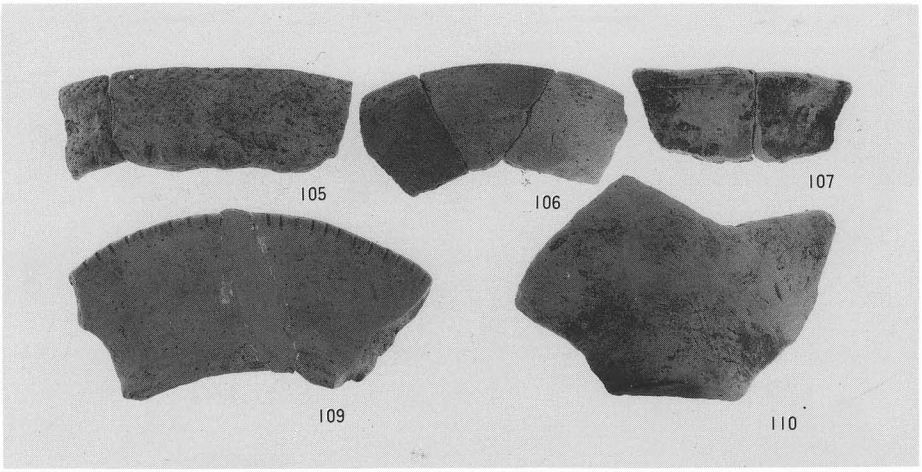
1．弥生土器・鉢



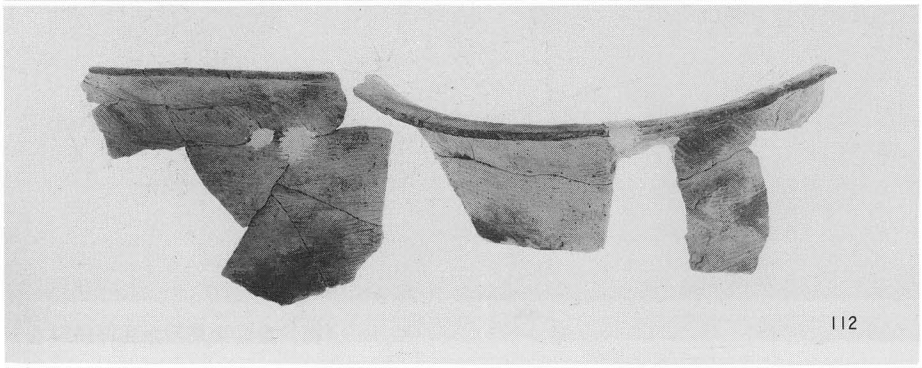
2．弥生土器・壺



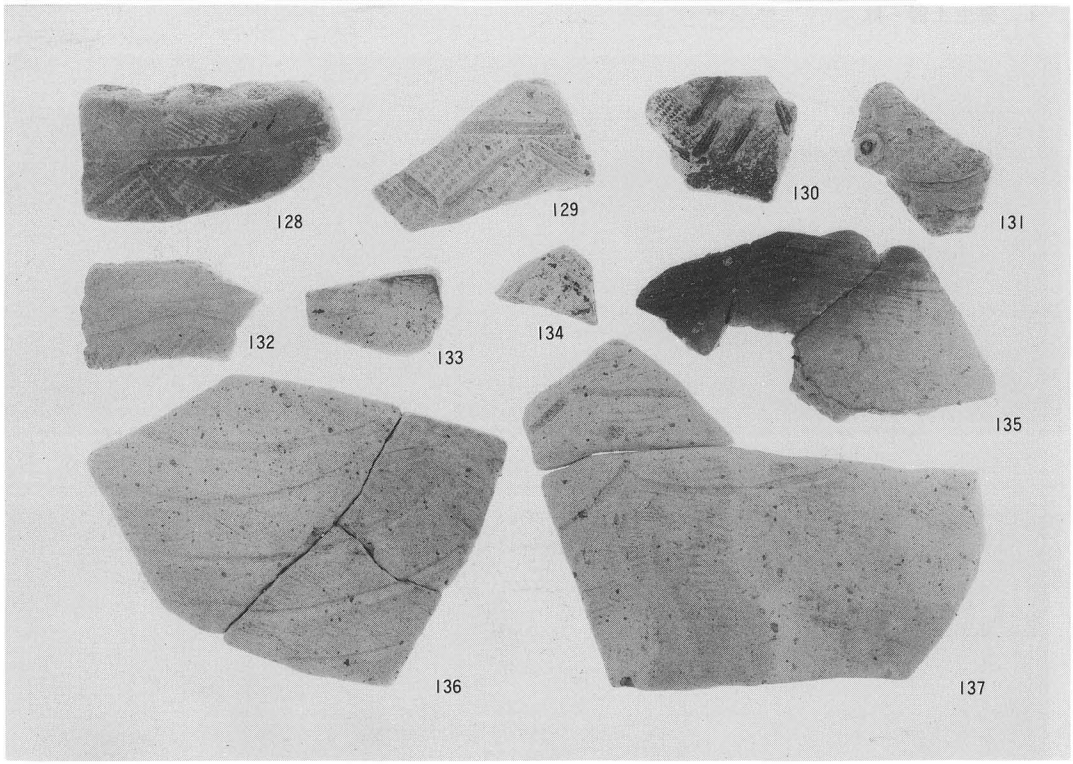
3．弥生土器・甕



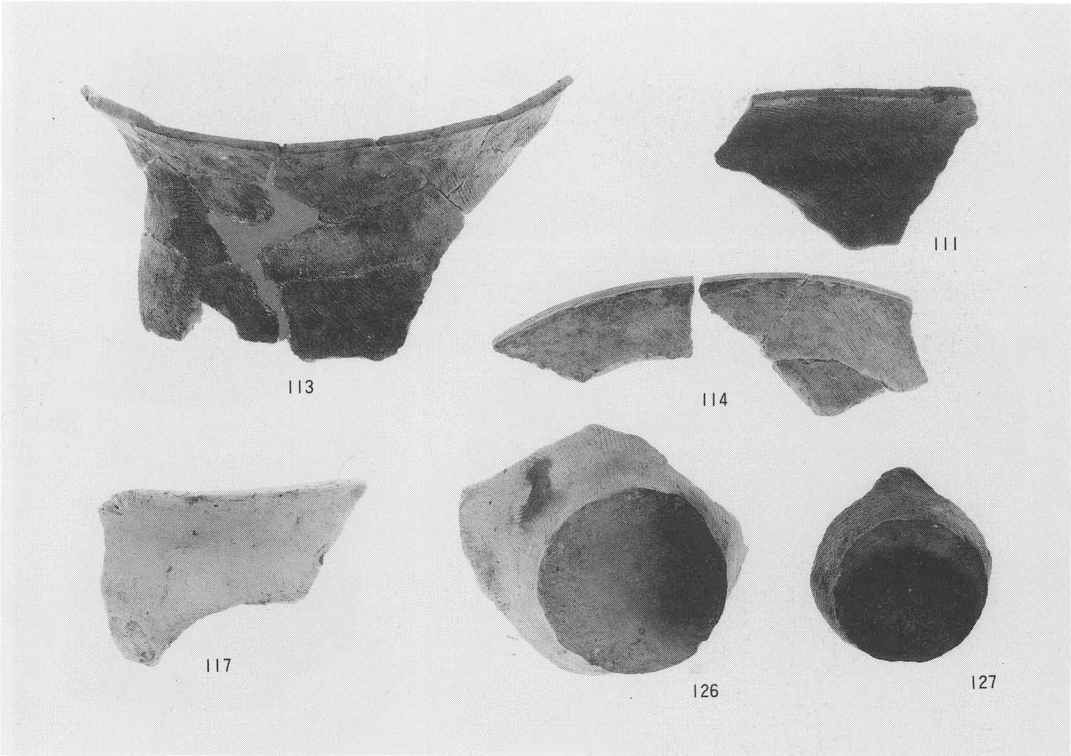
1．弥生土器・壺



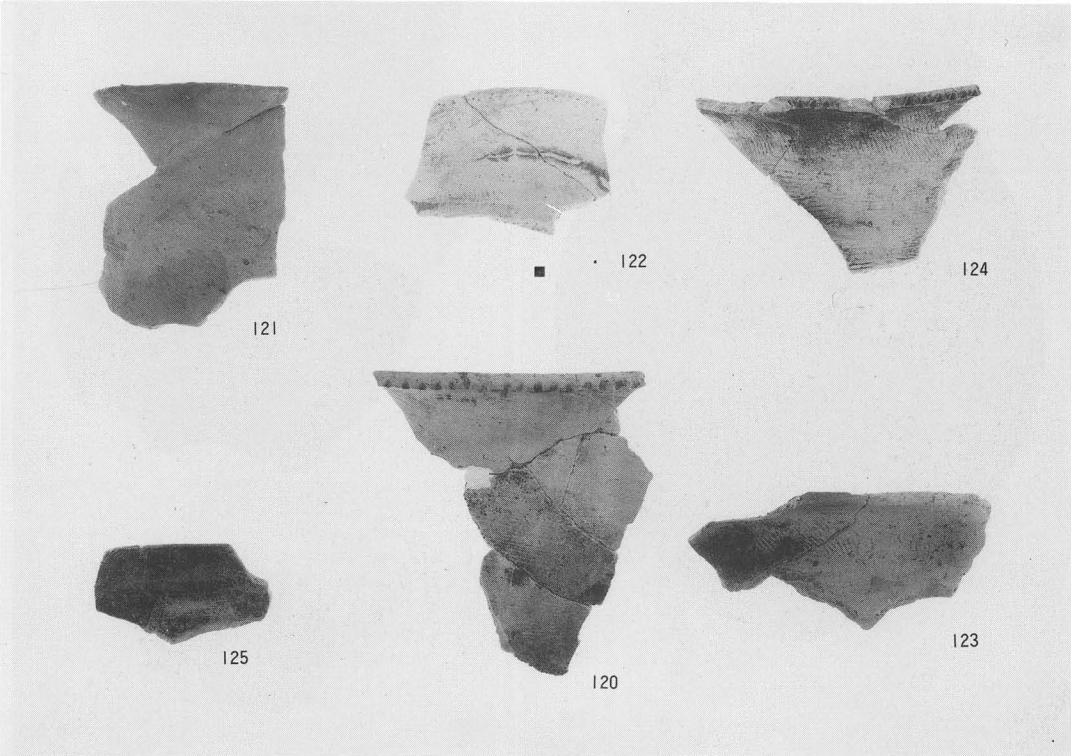
2．弥生土器・甕



3．東日本系の弥生土器

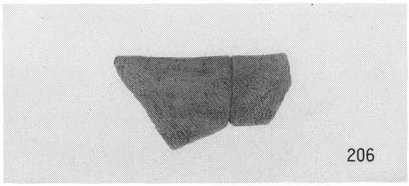


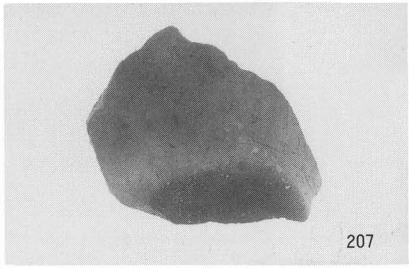
1．弥生土器・甕

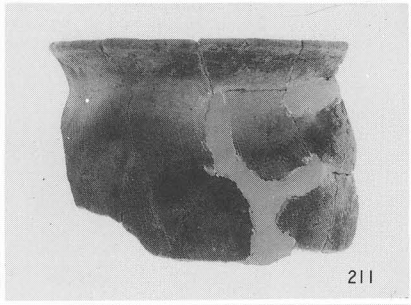


2．弥生土器・甕

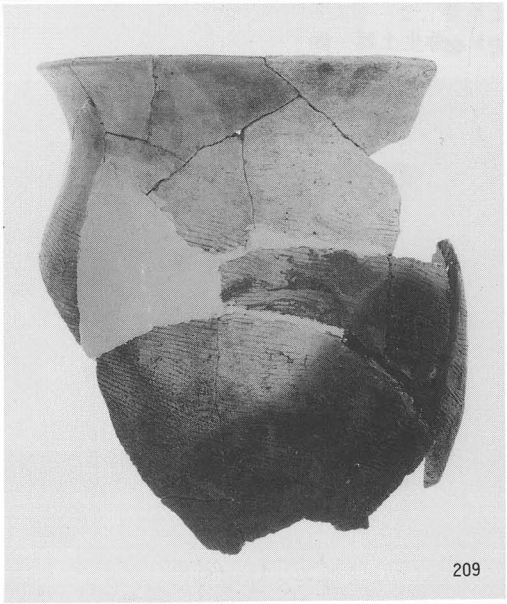
205

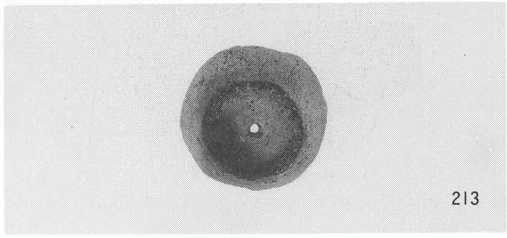

206


207

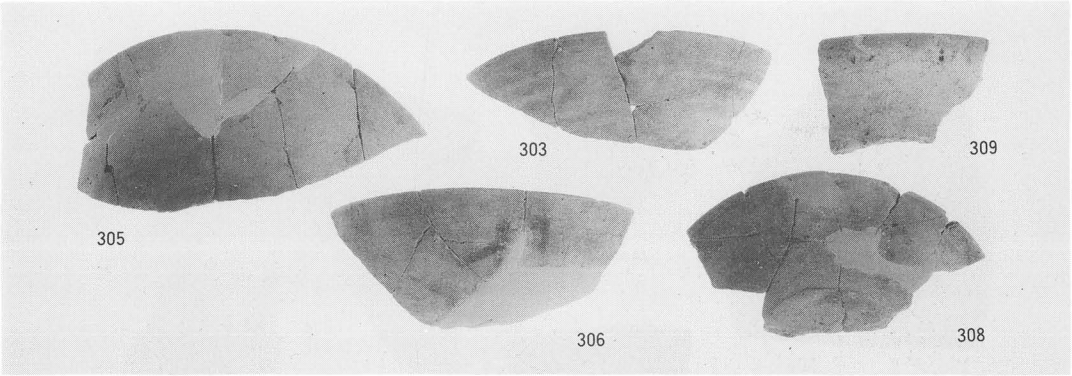

211

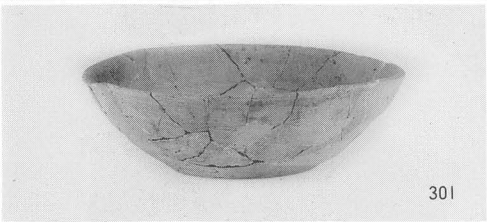
208

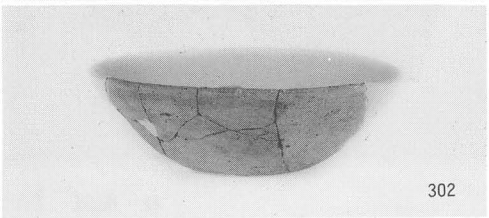

209

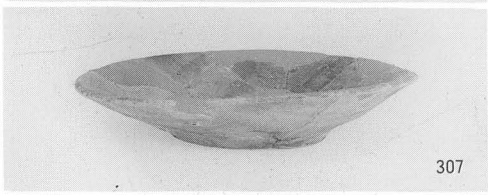

213

土師器

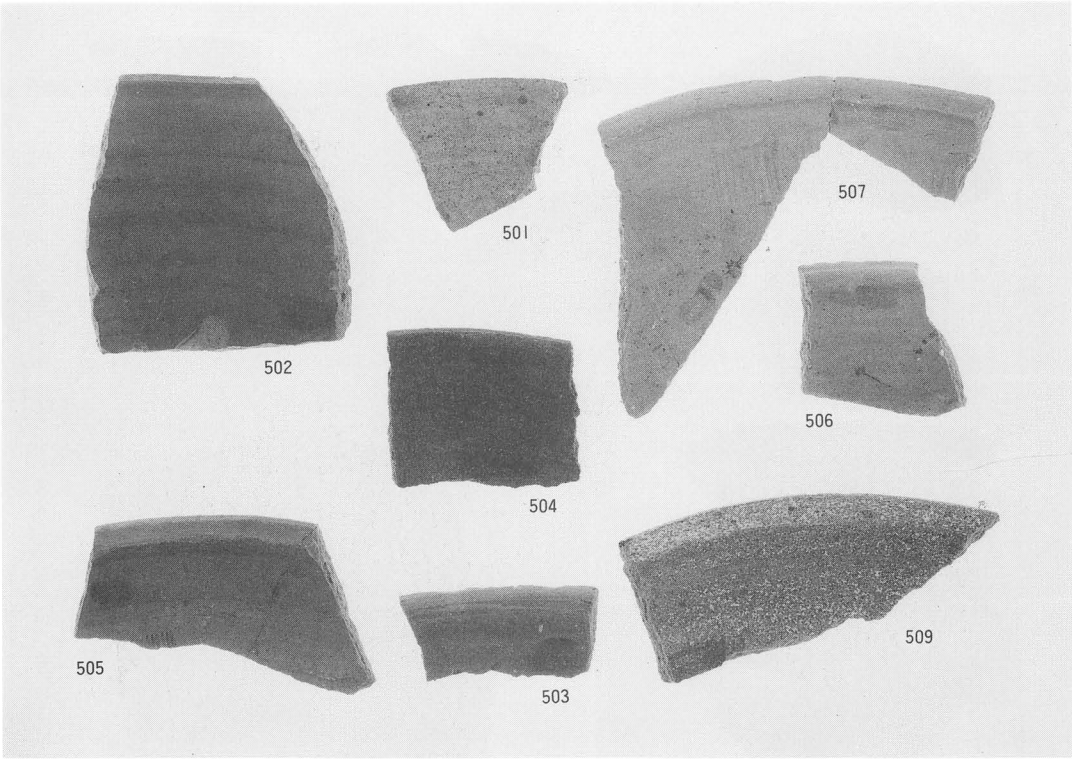




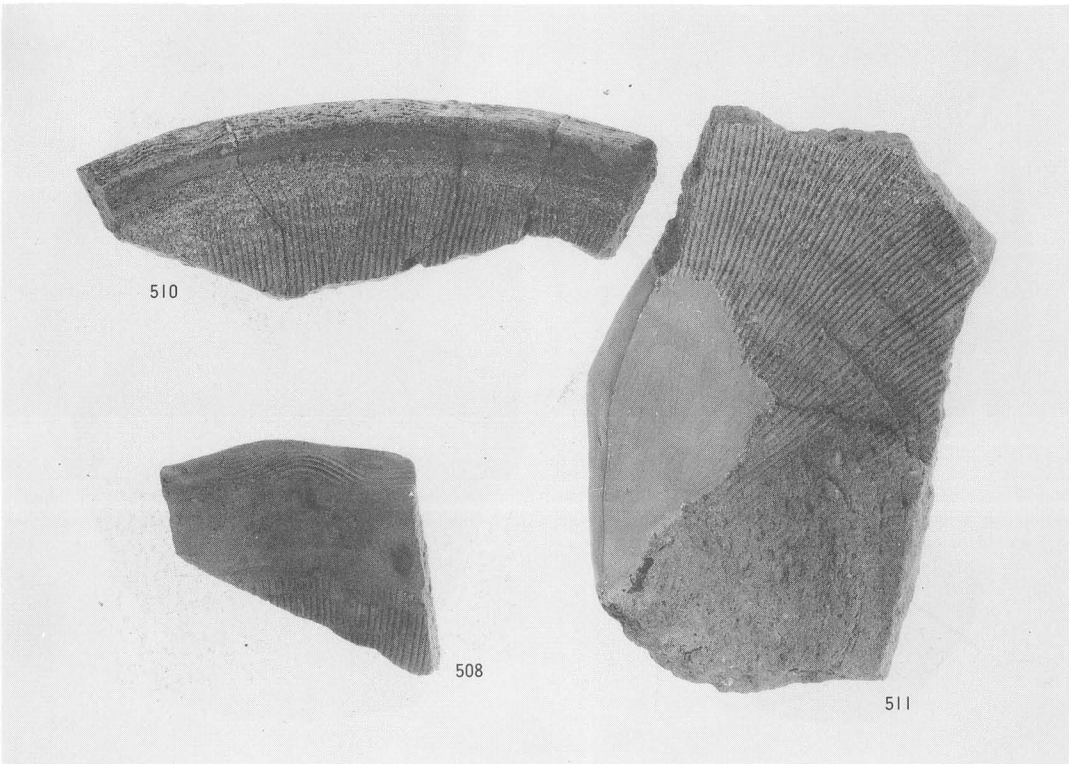




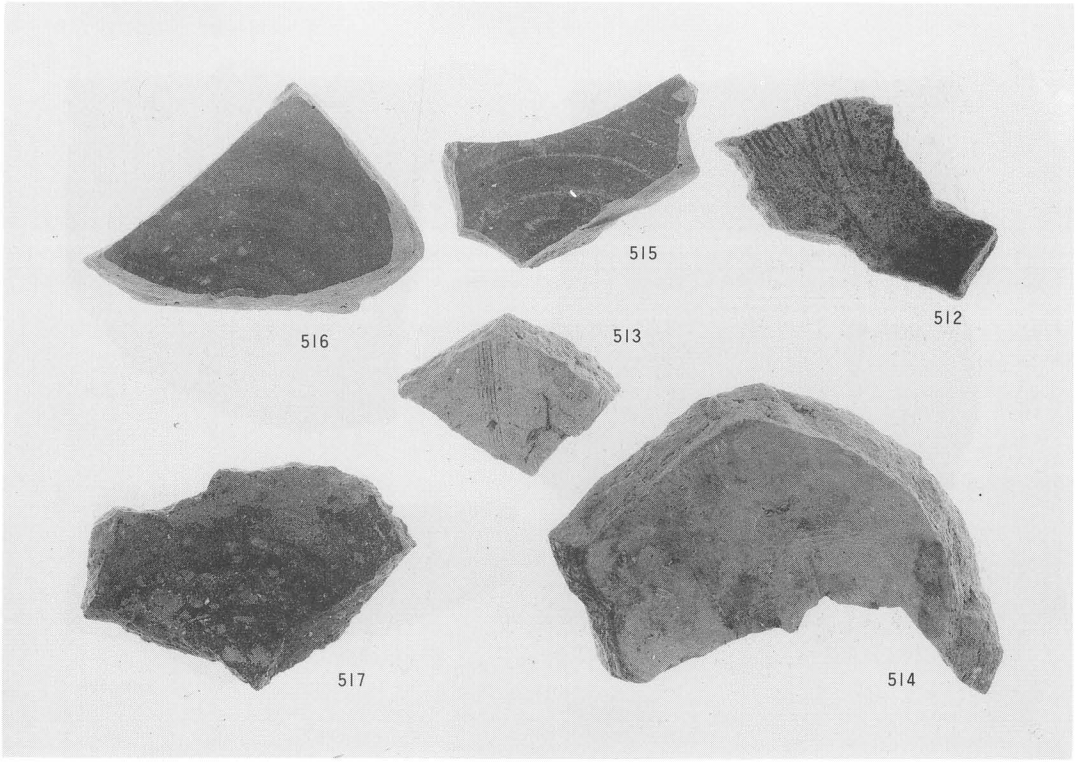
土師器，須恵器



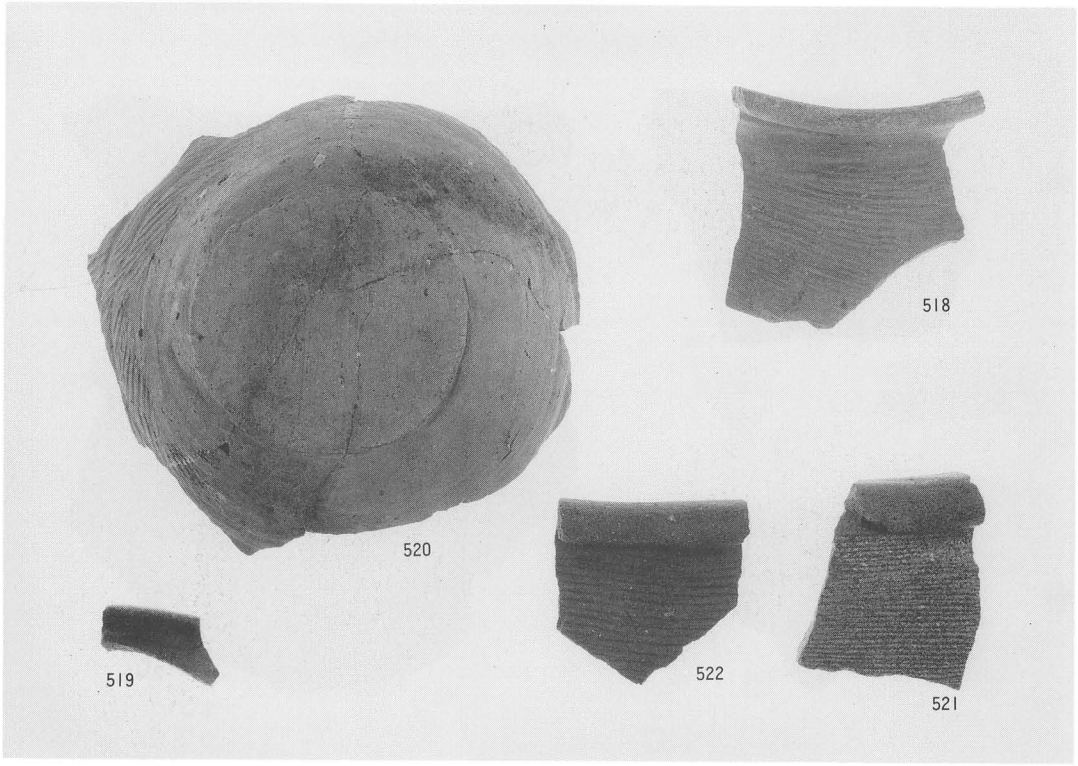
1．珠洲・鉢



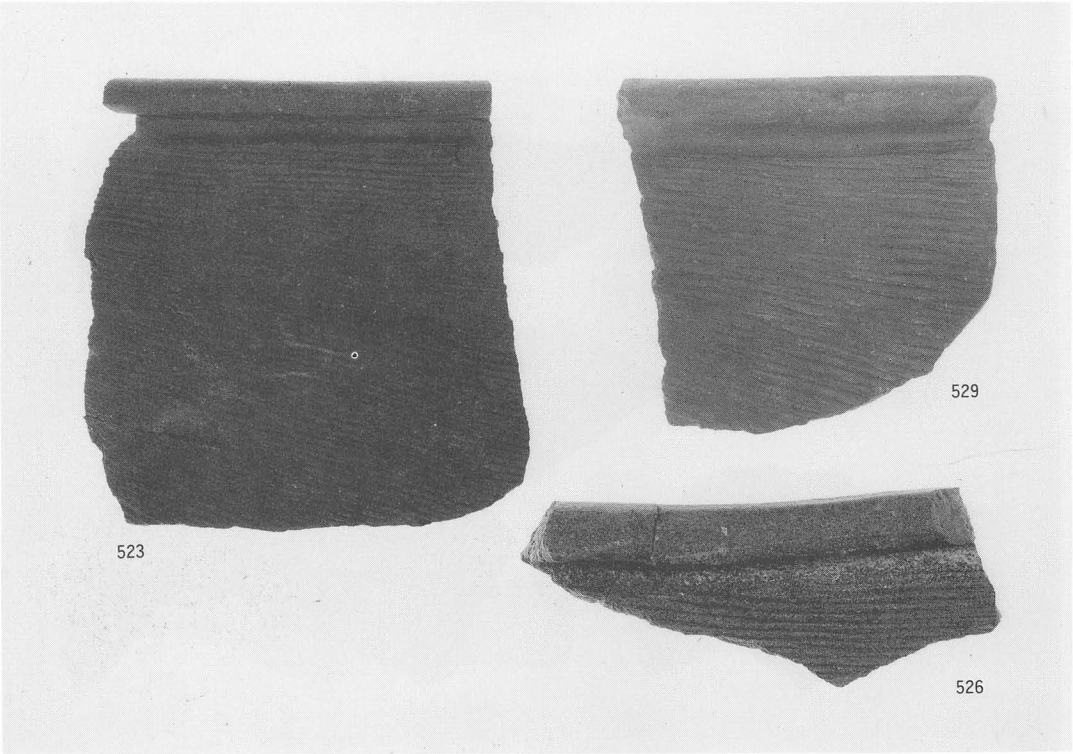
2．珠洲・鉢



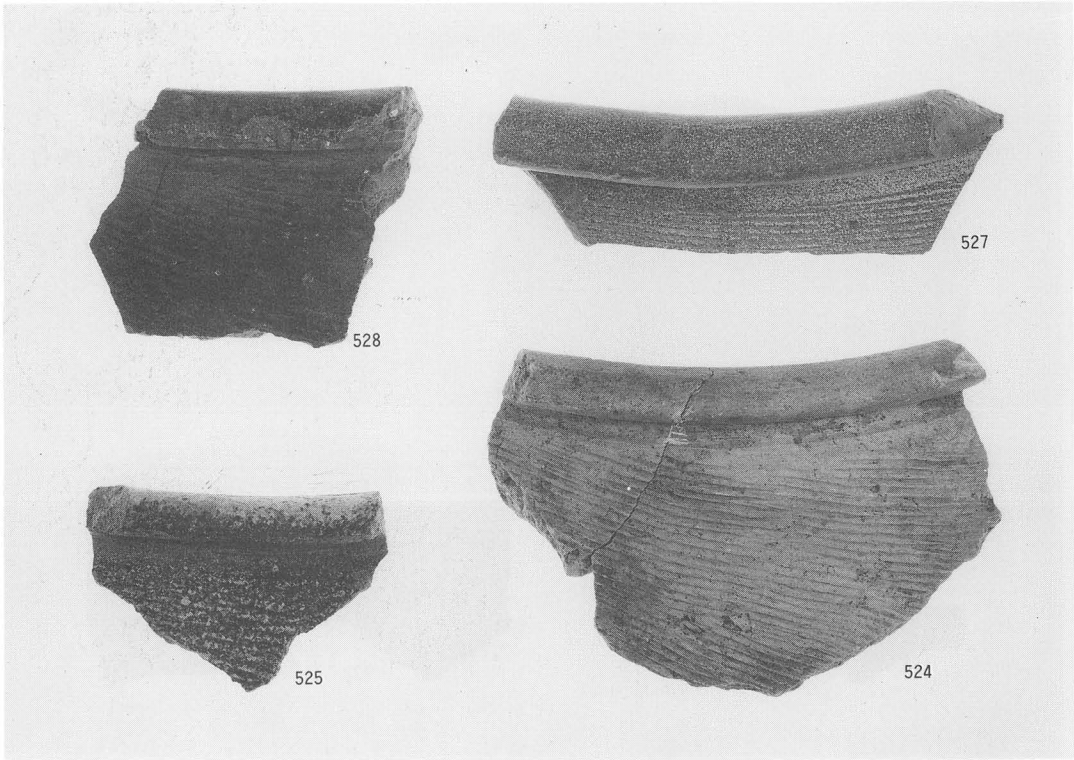
1．珠洲・鉢



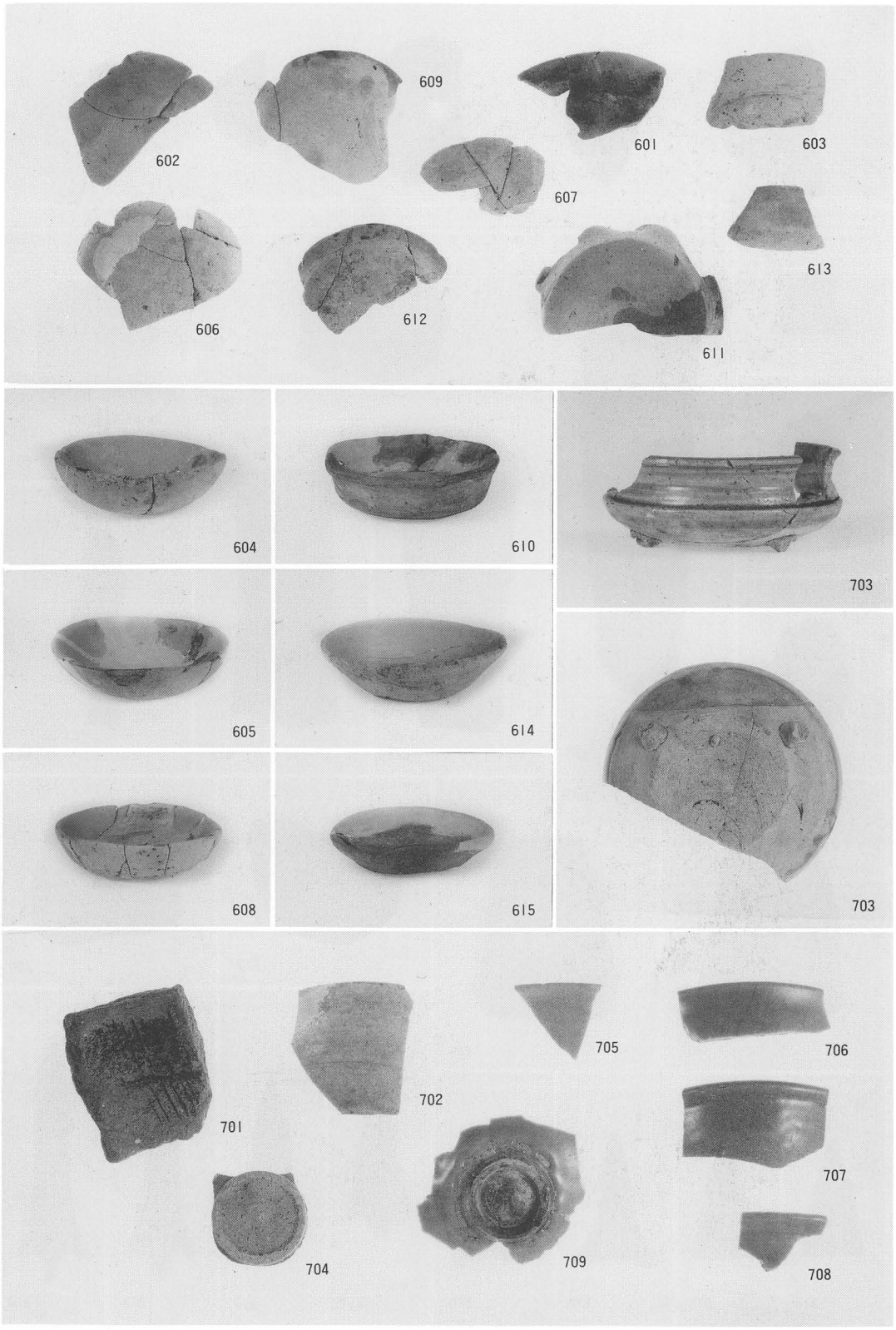
2．珠洲・壺・甕



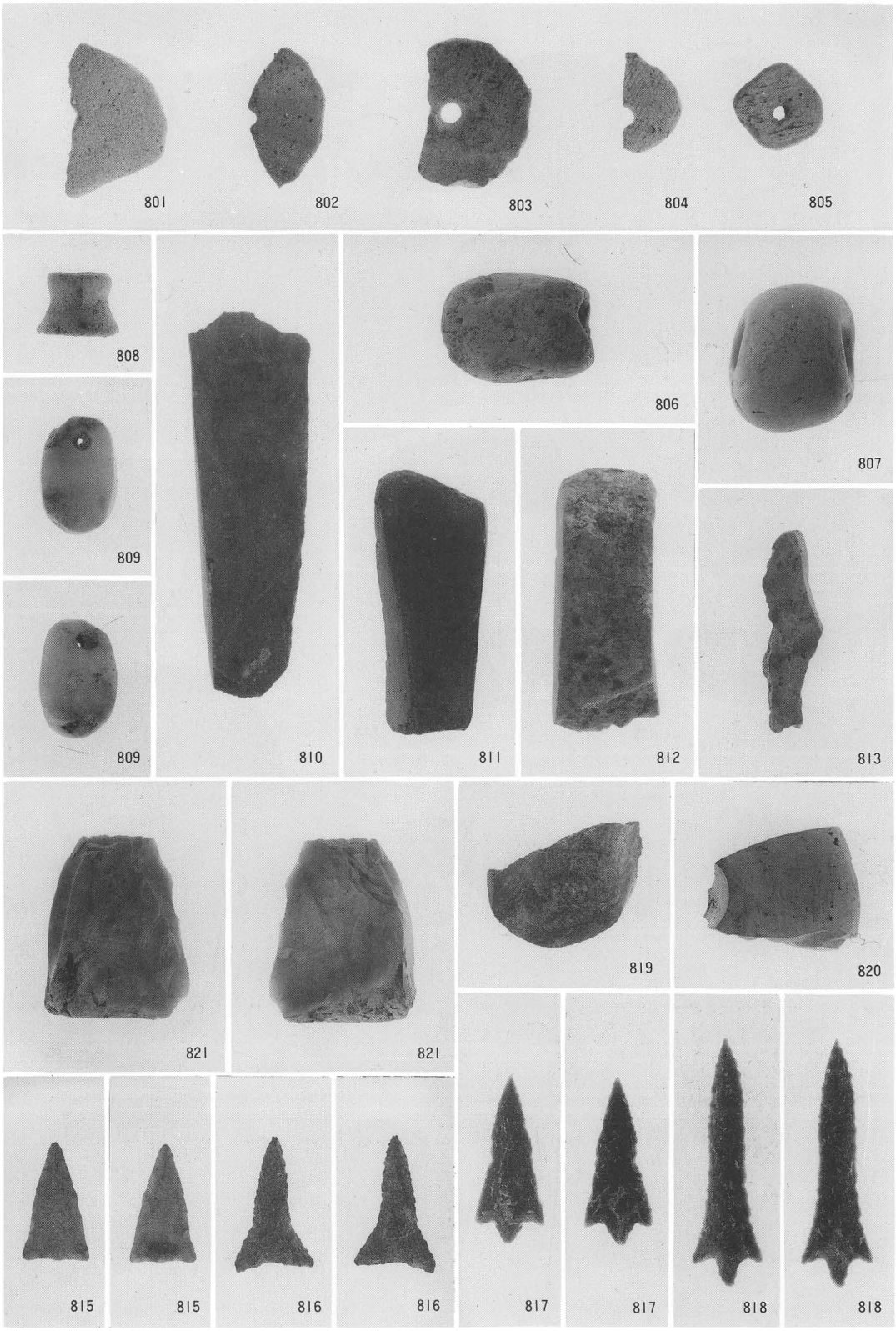
1．珠洲・甕



2．珠洲・甕


602
609
601
603
607
613
606
612
611
604
610
703
605
614
608
615
703
701
702
705
706
707
704
709
708

土師器，陶磁器


801
802
803
804
805
808
806
807
809
809
810
811
812
813
821
821
819
820
815
815
816
816
817
817
818
818

土製品，石製品，石器

高岡市埋蔵文化財調査概報第6冊

石塚遺跡調査概報Ⅱ

1988年3月31日

発行者　高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路7－50

印刷所　小間印刷株式会社

富山県高岡市利屋町3